
鎮魂歌

だいちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂歌

【Nコード】

N1471P

【作者名】

だいちゃん

【あらすじ】

茅ヶ崎に近い町に住む少年、葉山礼司は高校を中退したフリーター。ある日、ひいばあちゃんの家遊びに行った帰りにトラックにはねられ、瀕死の重傷を負う。その時に臨死体験を経験し、ひいおじいちゃんの霊が見えるようになる。・・・死後の世界とは？輪廻転生とは？人は死んだらどうなるのか？自分なりの解釈で考えて、小学校のころに読んだ、某心霊小説からヒントを得て書きました。子供のころから書いてみたかった小説です。

葉山礼司の悲惨なる一日（前書き）

主人公、葉山礼司は高校を中退したフリーター。大好きなひいおばあちゃんの家には家族旅行のおみやげを持って行くように母親から頼まれたことから、物語は始まる。

葉山礼司の悲惨なる一日

1999年7月の夏。

はるか遠くの異国の預言者、ノストラダムスが予言した、恐怖の大王は降りてこなかった。

新しく出たアーティスト、宇多田ヒカルや浜崎あゆみ、ポルノグラフィティの歌が街中で流れていた。

遠い異国のアメリカのHIPHOPアーティストのまねした、B-BOYファッションが街では流行り始めた。

ルーズソックスを履いた女子高生と、B-BOYスタイルに身を包んだ少年達を街でよく見かけた。

そして、携帯電話とPHSが出始めたのもこのころだ。

まだ、今と違ってインターネット自体が全体的にあまり家庭には普及しておらず、今では当たり前前の携帯電話パケット定額のシステムは確立されていない時代だった。

携帯を使いすぎて、携帯の料金が月に3万円を超えるやつもいた。皆、携帯の料金を払うがためにアルバイトを必死にしていた。

そして、この年の前年、凶悪な少年犯罪が起きたことで、『未成年、17歳は危険だ』と言われるようになる。

そんな時代、俺は茅ヶ崎で1番偏差値の高いH高校を、喫煙と喧嘩ですぐにクビになった。

腹がうだるように熱い。

うーん………。

うなされるようにして目を開けると、俺の腹の上にタマが気持ちよさそうに寝ていた。

「なんだよ……タマ、あっちいけ。」

腹を起こすと、どこかへいってしまった。

とりあえず、テレビをつけよう。

俺の一日は、テレビを見ることから始まる。

NHKは別にいい、いいともを見よう。

「礼司。」

母親が、急にノックもせずには部屋の中へ入ってきた。

「おはよう?。」

「礼司、ひいじいちゃんの所へ、これを持って行って。電車賃とご飯代はこの封筒の中だから。別に用とかないでしょ?。」

「昨日、家族でいった伊豆の旅行のお土産。」

中身は伊豆名物のおまんじゅうだ。

「ああ。」

「あと、C高校の定時制のパンフレット、机の上に置いておくれ、良く見ること。・・・あなた、大学はいつでもいけるけどさ、今のうちに高校でなきゃだめだよ。」

「・・・へいへい。」

母親の言葉は痛い。

汗になったタンクトップを脱ぎ、新しい黒のシャツ、チェック柄のショートパンツに着替える。

首には、昨日N高生からかつあげした金で買った、チョーカーをつるす。

「ひいおばあちゃん達、あんたのことを心配しているんだから、早く高卒の資格取らなきゃだめだよ。」

「へいへい。」

「ご飯はここに置いていくから。母さん、これから町内会の会合だから、お昼は勝手に食べてね。」

「いつてらっしゃい。」

母親は、寒川町にある小さなイモ製菓工場で昼間は働いているし、親父は藤沢にある製菓工場でエンジニアとして働いていて、帰ってくるのは夜遅い。

母親を見送ったあと、家の中に誰もいないことを見計らい、煙草

に火をつける。

1か月少し前、俺は学区内で最高ランクのH高校を強制退学になった。

理由は、喫煙と、街中での喧嘩、あと教師への暴行ぐらいしか思いつかない。

とりあえず、今日は予定もないし、バイトは明日だし……ひいばあちゃんの家に行こう。

サンダルを履き、玄関のカギを閉め、原付のキーを入れる。ここから、ひいばあちゃんの家まで、原付で15分くらいだ。

ひいおばあちゃんが暮らす家は、茅ヶ崎海岸の近くにある。

今日3本目の煙草に火をつける。

ひいおばあちゃんの家近くのセブンイレブンに原付を止めた。

3階建ての鉄筋コンクリート製。

ひいおばあちゃんとその娘（俺の母の姉）の家族と一緒に暮らしていた。

ひいばあちゃんはもうかなりの高齢で、今年で81歳になるが、ぼけておらず、ちゃんとやっている。

ただ、白内障を患ったせいか目があまり見えず、やや難聴で補聴器が欠かせない。

家の近くまで来ると、甚平を着たじいちゃんが玄関から出てきた。

「おう、礼司。ちゃんとやっているか？」

「やあ。旅行に言ってきたからおみやげをもってきたよ。」

じいちゃんは今年で55歳になる。

サザエさんの波平みたく、頭ははげまくっている。

「ありがとう。暑いから上がりな。何も食べていないだろう？ 昼ご飯でも食べて行きなさい。」

おいじちゃんと家の中に入ると、クーラーが効いていた。

来ているタンクトップはもう、汗でぬれていた。

「礼司。」

「こんにちは。」

「ばあちゃんとおばさん（母さんの双子の姉）が出迎えてくれた。年は53歳。」

居間に案内され、冷たい麦茶をもらう。

家の中は畳で、4LDKの間取り。

居間にあるテレビからは、俺の好きなハイロウズが『笑っていいとも』のゲストで出ていた。

麦茶をのどに流し込み、ひいおばあちゃんの部屋へ。

「お母さん、礼司がおまんじゅうを持ってきてくれたよ。」

ひいおばあちゃんは、椅子に座りながら窓の外を見ていた。

おばあちゃんが、ひいおばあちゃんの耳元でそつと呟く。

「礼？外、暑くなかったかい？」

「平気だよ。」

仏壇にむかい、座布団に座り正座した。

ひいおばあちゃんの部屋にある仏壇には、ひいおじいちゃんの写真が飾られている。

線香に火をつける。

部屋の中には、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんの若いころの写真が沢山飾られている。

俺が生まれる数日前、ひいおじいちゃんは心筋梗塞でこの世を去った。

「ねえ、おばあちゃん。」

「ん？」

「ひいおじいちゃんは一体どんな人だったんだ？」

「どうしたのさ？いきなり？」

「いや・・・気になってさ。」

「物静かな人だったよ。滅多な事で怒らなかったし。」

「そうか。」

ふと、机の上に置いてあったアルバムに目をやる。

アルバムの中には、ひいおじいちゃんの太平洋戦争の時の写真が

たくさんある。

零戦に乗っている写真、ひいおばあちゃんとの結婚式の写真、そして、赤ん坊だったおばあちゃんを抱く写真。

終戦記念番組の再放送が隣の部屋のテレビから流れている。

今日は、8月15日、終戦記念日だ。

・・・もし、戦争が長引いていたら、俺は存在しなかったのかもしれない。

おばあちゃんの家を出ると、もう3時だ。

原付の置いてあるコンビ二により、煙草に火をつける。

買ったばかりのPHSから、着信が入った。

「おい、今からあそばね？」

茅ヶ崎から少し離れた、寒川町にあるS高校に通う友人、西野浩二^シからだ。

「いいよ。」

「じゃあ、ユニクロ集合な。」

「オツケー。」

PHSを切り、ゆっくりと原付に乗り、エンジンを入れる。

ヘルメットを被って、道路に出る。

道路に出て、直ぐに原付のスピードを徐々に上げ、最高速度に持っていく。

街の景色が目の前をあっという間に通り過ぎる。

そして、茅ヶ崎駅前に差し掛かり、速度を緩めようとした瞬間、

目の前に子供がいきなり飛び出してきた。

「うおっ!?!」

とっさに、ハンドルを右に切る。

俺のすぐ右、右側の道路から、トラックが飛び出してくるのが見えた。

突然、目の前が暗くなる……。

『礼司……!』

耳元で、聞いたことのない声がする。
次の瞬間、俺の意識は消えた。

葉山礼司の悲惨なる一日（後書き）

とりあえず、主人公を大変な目にあわせてみました。

16歳の臨死体験（前書き）

礼司、人生初の臨死体験で、若き日のひいおばあちゃんと出会う！

16歳の臨死体験

うーん……。

体中が重い、というか熱い。

まるで、サウナにいるような感覚だ。

目を開けても、暗闇しか見えない。

無理やり、重い体を起こす。

目の前には暗闇しか広がらない。

歩いてもあるいても、なにも景色は変わらない。

『礼司。』

後ろから、ひいおばあちゃんの声が聞こえる。

正面に、死に装束を着た20代後半くらいの女性がいきなり現れた。

かなりの美人、だが、どこかで見たとのことのある顔。

(「もしかして……?」)

写真で見た、ひいおばあちゃんの若いころの写真とその女性はそっくりだ。

『さつきはおみやげありがとうよ。おばあちゃん、これからあの世に行かなくちゃいけないから……。』

「えっ!?!」

やっぱり、ひいおばあちゃんだ。

けど、あの世に行くって!?

さつき会ったときは、元気だったのに。

医者から、健康体だって言われたのに。

『お迎えが来たから、行くね。お父さんとお母さん、おじいちゃんおばあちゃんの言うことをちゃんと聞いて、大検の資格を取ってまともに生きるんだよ。私の代わりに、ひいおじいちゃんがお前達を見守ってくれるよ。そろそろいかなきゃ……じゃあね……。』

「ええっ!? おばあちゃん、待ってくれよ!?!」

ひいおばあちゃんの体を触ろうとした、が、熱い風のようなものにはじき返される。

『……あと、お供え物は、こしあんのおはぎがいいって、皆に伝えといておくれ。つぶあんは絶対駄目だよ。こしあんじゃなかつたら、祟るよ。じゃあね……。』

ひいおばあちゃんの顔が、みるみるうちに『リング』の貞子のようになる。

一瞬のうちに、元の優しい顔に戻ると、光に包まれ、一瞬のうちに消えた。

「ええっ!? たったそれだけで祟るの!? 待ってくれよ……! ひいおばあちゃん!?!」

『冗談だよ。フフフ……。』
目が覚めた瞬間、体に激痛が走った。

「礼司!?!」
母さん、親父、ねえちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、おばあちゃんの息子夫婦とその双子の兄弟が一斉に視界に飛び込んだ。き

た。

親戚が一気に集まって、どうしたんだらうか?
「どうしたんだよ? 俺は? ……いつててて……!?!」
全身、特に頭が痛い。

体中には、無数のチューブがつながれているのが見える。
テレビで見たことのある、重症人の治療風景。

(「俺は一体どうなったんだ!? ……ていうか頭と体がいてえ!」)

体を起こそうにも、重くて俺の体じゃないみたいだ。

「礼司! 一瞬死んだかと思っただじゃない!」

姉の加奈子が、泣きながら俺の顔を思い切りたたく。
叩かれるたびに、頭に激痛が走る。

「加奈子! 兄弟喧嘩はこいつが退院してからやれ! ……礼司

！お前はトラックに正面からぶつかって、電柱に思い切り頭からたたきつけられて、丸3日、昏睡状態で脳死ってさつき医者に診断されたんだよ……！！お父さん達な、お前をドナー登録するかどうか会議していたんだよ！起きがけで悪いが、お前に言わなければならぬことがあるんだ……。」

「？」

俺をドナー登録だつて！？

「ひいおばあちゃんが、さつき、亡くなった……。お前が事故にあつて入院する1時間くらい前に、心筋梗塞で倒れてな……隣で寝ているから、別れのあいさつしろ。」

（「嘘だ……！」）

親父に目で隣を見るように言われ、激痛の走る首を曲げた。鼻に詰め物の入った老女。

すぐに、ひいおばあちゃんだと分かった。

「ひいおばあちゃん……。」

嘘だ……。」

目から、熱い水が落ちてくる。

泣くのは2ヶ月振りだ。

だが、ひいおばあちゃんが生前かなりの美人ってのは別として、ひいおじいちゃんが、俺達を護るって言うていたが……。

曾祖父、降臨（前書き）

礼司一家、初めての体験。
夢枕にて、曾祖父と出会う！

曾祖父、降臨

俺が植物人間の状態から復活してから、1年の月日が流れた。俺の体は全身が打撲、右足は複雑骨折、何箇所かの骨にひびが入り、脳内出血に頭がい骨骨折。

医者は驚いた顔で『体の怪我自体は大したことはないが、脳の機能が完全に停止した、脳死の状態だったため、意識の回復は絶望的だった。』と言われた。

そして俺は無事にリハビリを終え、定時制のある高校に通うこととなった。

実家から高校まで、自転車で15分くらいの距離。

俺はそこに、1か月前から通っている。

ひいおばあちゃんの遺言どおり、茅ヶ崎霊園にあるひいばあちゃん墓には毎週のようにこし餡のおはぎをお供えしている。

そして今俺は、明日の試験に備えて、11時頃まで勉強をしていた。

「ただいま。」

姉の声が玄関から聞こえる。

「礼、おねえちゃん帰ったよおお。」

階段を下りると、酒のにおいがたちこめている。

姉のきているシャツは、既にゲロを履いた後のシミが残っている。

（「……みつともねーよ！」）

「お父さんとお母さんはあ？」

「2人とも、今日は夜勤でいないって言ったじゃん。うわっ、超酒くせ。」

「礼。お風呂わいてるの？」

「シャワーで我慢しろ！」

「歩けないよ。お風呂までおんぶしてよ。アハハハ……。」
「ったく、しょうがねえな……。」

玄関でくつろぐ姉を背負おうとすると、いきなり首を絞めてきた。
「ぐえっ！」

「おらー！アハハハ・・・うっ！」
オエエエエエと言う声と、おう吐物が、昨日ユニクロで買ったばかりのスウェットにかかる。

いきなり、背中におう吐してきやがった！

「うわっ、くっせー！」

「アハハハ・・・。あーすつきりした。」

「すつきりしたじゃねえよ！」

泥酔した姉は、俺の体を突き飛ばし、そのままベットへ。

姉の吐いた背中が冷たくて臭い。

明日は休みだと言っていたから、きつと、居酒屋で酒でも飲んだのだろう。

（「・・・いい加減、結婚しろよ・・・！」）

俺の姉、紀子は俺の6歳上で、学区内で2番目に高い偏差値のT高校を卒業して、K大に進学しこら辺の銀行で働いていた。

（「煙草を買い忘れていた。」）

親父の部屋の仏壇に、お供え物の煙草が確か置いてあった筈だ。生前、ひいおじいちゃんが吸っていたマイルドセブン。

俺が吸っている銘柄と同じだ。

丁度いい、盗もう。

親父の部屋は誰もいない、仏壇にある煙草を取った。

『こらっ・・・！』

後ろから、聞いたことのあるような声がするが、誰かわからない。空耳か？きつと音楽を聞きながら勉強していたからだろうな。

仏壇にある煙草を取り、パッケージを開けて煙草に火をつける。

『こらっ！俺の煙草だぞ！』

耳元で、誰かの声が聞こえる。

さつきよりもでかい。

背筋が物凄く寒くなったと思ったら、目の前に変な帽子をかぶっ

た男が現れる。

『俺の煙草吸ってんじゃねーよ。』

男はそう言った直後、ふっ、と消えていった。

怖くなり、煙草を仏壇に置いてある灰皿に捨てて、すぐに蒲団の中へ入った。

目が覚めると、ひいおばあちゃんの時と同じ、暗い闇の世界が広がっていた。

「礼司・・・！」

今度はひいおばあちゃんじゃない、姉がパジャマ姿で目の前にいた。

「どこよ、どこ？」

姉の隣には、母さんと父さんがいる。

おじいちゃん、おばあちゃんも、そして、おじさん夫婦と甥子たちも。

「おじちゃん、どこどこ？暗くて怖い。」

「どこだ？」

「どこ？暗くて、私たち以外何も見えない・・・？」

俺達はお互い確認できるが、周りが暗い。

『よう・・・。』

俺達の目の前に、いきなり男が現れた。

男はゴーグルと飛行帽を被り、カーキ色の服を着て、チョッキ

みたいなものを羽織り、長い靴を履いている。

「おじいちゃん！」

おばさんが言う。

昔テレビで見た事のある、太平洋戦争中の飛行兵の制服。

『驚いているな・・・無理もねーか。ここは、魂が生活する空間・

・俗に言う、死後の世界ってやつだ。本当ならば、身体の死んでいない人間は入ってこれねーんだがな・・・佳代子の頼みで、夢枕に立って、わざわざこの世界にお前らを呼んできてやったんだよ・

」。

「あなたは・・・、ひいおじいちゃん!？」

佳代子は、ひいばあちゃんの名前だ。

母さんが男に尋ねる。

「ああ。17年ぶりの再会だなー、良子。佳代子そっくりに、綺麗な女性になったな。皆元氣そうだねー。義弘さん、至らない馬鹿な孫とひ孫たちですが、よろしくお願いします。」

義弘は、俺の親父の名前だ。

ただ、至らないひ孫つてのが気に食わないが。

「おじいさん、お久しぶりです・・・この世界は一体?」

「クク・・・驚くのも無理はねーよね?・・・この場所はな生き物の体が滅んだ後、魂が行きつく先の場所つてやつさ。そして、魂は他の生命体へと生まれ変わり輪廻していくのを待機する場所だ。」

「輪廻・・・?」

「ああ、生物は死んでも、魂は滅ばずに他の生き物へ生まれ変わる。」

「じゃあ、ひいおばあちゃんは?」

姉が尋ねる。

「1年前、礼司が交通事故に遭った3日後に、他の生き物に転生した。もしかしたら、昨日お前さん達が殺した虫けらかもしれないぜ?・・・ククク。」

「虫けら?ひいばあちゃんかだと!？」

思わず、声を荒らげてしまった。

「礼司。」

母親が諫める。

「クク・・・残念だが、何の生き物に生まれ変わったのかは俺にもわからないなあ・・・。本題に入るか・・・。」

ひいおじいちゃんは、一呼吸して、言った。

「明日な、茅ヶ崎駅の線路で、戦争中に、アメリカ軍が爆撃で使った口ケツト弾の不発弾が見つかる。爆発する危険が高いから、明

日お前ら全員家から出るな。」

「えっ？いや、俺明日試験なんだけど。」

「茅ヶ崎駅に行かなければ問題なくねー？」

「駄目だ。家にいる。絶対に出るんじゃないぞ。俺は佳代子からお前らを護るように頼まれているからな。」

複雑な気分だ……。

「……おっと、そろそろ、少しのお別れのようだな。また、何かあったら夢枕に立つからな。じゃあな。……あと、礼司、俺の煙草吸うんじゃないやねえよ？未成年だろう、お前は。……義弘さん、こいつらをよろしくお願いしますよ。」

「礼司、煙草って……。」

「ジジイ、昨日の声は……。」

次の瞬間、目の前が、強烈な光に包まれる。

目が覚めると、いつもの蒲団の中にいた。

朝になり、親父達に学校を休むことを伝えると、親父達も俺と同じ夢を見て、ひいおじいちゃんの指示通りに、全員学校や会社を休むことにした。

8時ごろ、おばあちゃんの家からも電話がかかってきて、ひいおじいちゃんが夢枕に立って、茅ヶ崎に絶対行くなと言われたという。

おかげで、今日は一日休みだ。

おばあちゃんたちも、今日の予定をキャンセルするそうだ。

学校が休める、なにをしようか？だが、追試になるから勉強をしなければならぬから憂鬱だった……。

母さんが、いつものようエプロンをして朝ごはんを作っている。

冷蔵庫からコーヒーを出して、のどに流し込む。

「昨日見た夢って何だったんだろうね。ひいおじいちゃん、何気にイケメンだったし。」

姉が言う通り、確かに、ひいおじいちゃんは端正な顔つきをしていた。

冷たいコーヒーを、姉が口をつけ、テレビをつけた。

目ざましテレビのアナウンサーが、茅ヶ崎海岸のことを紹介していた。

「輪廻や転生・・・俺は霊はどちらかといえば信じないし、死んだら無の世界しかないって思っていた。死後の世界は宗教や漫画の中の話かと思っていたが、・・・死後の世界はあるのか。死んだ親父やお袋も、そこで暮らしているか、他の生き物に生まれ変わったのか。」

親父がうれしそうに言う。

親父の両親、じいちゃんばあちゃんは2人ともこの世にいない。

ばあちゃんは親父が俺ぐらいの時に乳ガンで、じいちゃんは俺が10歳の時に急性心筋梗塞でこの世を去った。

だから俺に、おばあちゃん達の思い出はない。

親父の言うとおり、死後の世界なんて、宗教や漫画の話だけかと思っていた。

「何でも教えてくれるならさく、株の動きとか教えてくれないかな？そうしたらうちら億万長者じゃん。」

姉の言うとおりだった。

「馬鹿言ってるんじゃないの。真面目に生きるのが一番だよ！そんなこと言ったらおじいちゃんにたたられるよ。」

母が姉を叱り飛ばした。

テレビのリモコンを取ろうとしたら、緊急ニュースが入った。

『本日8時10分、茅ヶ崎駅の線路で爆発事故がありました。死者は8名、負傷者はなし。目撃者の話によると、いきなり地面が爆発。警察はこれを、テロ事件とみて捜査・・・。』

右手に持った、コーヒーを思わず落としてしまった。

戦時中、隣の平塚で大規模な爆撃があった。

1945年4月某日、B29爆撃機とP51護衛戦闘機合わせて約200機の大編隊が、平塚にある軍事工場と平塚から少し離れた厚

木航空基地を爆撃するために、硫黄島から飛び立った。

その際に、B29の護衛戦闘機P51、1機が悪天候と計器の故障で、編隊からはぐれ、茅ヶ崎に迷い込んだ。

このP51は平塚から少し離れた、厚木にある航空基地への襲撃に使うために、ロケット弾数発を搭載していた。

当時の戦争関係の資料には、茅ヶ崎が爆撃にあつたことも、戦闘機が飛来したことも書いていない。

何故、それを知ったのかって？

茅ヶ崎駅の事件から後日、ひいじいちゃんの仏壇に煙草を供えたら、ひいじいちゃんの霊が現れて、俺だけに、そつと、教えてくれた。

編隊からはぐれたP51を追っていたのは、当時、厚木飛行場に勤めていた、ひいおじいちゃんが乗っていた零戦だった。

ひいおじいちゃんの追撃に気がついたP51は、速度を上げるためにロケット弾と燃料タンクを茅ヶ崎駅の線路へ投下した。

機体が軽くなったP51は、そのまま逃げずに引き返し、ひいじいちゃんの乗る零戦と戦闘、激しい戦闘の末、茅ヶ崎海岸のエボシ岩付近で弾丸をエンジンと燃料タンクに受けて爆発。

ひいじいちゃんは、P51がロケット弾を投下し、爆発しなかつたことを戦闘中に見ていたが、その直後の激しい戦闘と連日の出撃、戦後の動乱で、死ぬ直前まで普通に忘れていた。

曾祖父、降臨（後書き）

いくら小説の世界とはいえ、茅ヶ崎の人たちに物凄い悪い事をしてしまったと反省。

DAYS (前書き)

19歳になった礼司は、ある日、定時制高校で知り合った二人の男女と、地元の友達と茅ヶ崎海岸に泳ぎに出かける。礼司は、ひいおじいちゃんから夢枕で、あることを頼まれていた。

DAYS

2002年7月2日、俺は19歳になり、無事に定時制高校の3年制へと進学した。

ひいおじいちゃんとは、週に1回くらいのペースで夢の中で出会う。いつも出会うときの決まり文句は、『まじめにやっているか?!』。そして、軽く話した後、夢から覚める。

夢の中のひいおじいちゃんは、相変わらずぼろぼろの飛行服に身を包み、お供え物の煙草をくわえ、たまに、お供え物の食べ物を食べたりしているときがある。

俺だけではなく、姉さんや母さん、親父やじいちゃんたちの夢枕に立ち、仕事や人間関係のアドバイスをしてくれる。

生前、ひいおじいちゃんは厚木飛行場に勤めていたことしか俺達は知らない。

C高校の校舎は、最近立て直したものの、カビや汚れでぼろぼろだった。

俺のクラスは昼間、普通科で使っているクラス。クラスに入ると、さまざまな面々がいる。

病気で高校を退学になった人、俺と同じように、高校を退学になった者、家庭の事情で高校に行けなかった者。

俺と同じくらいの年齢の奴は、俺を入れて3人くらいしかいない。新川信司は、H高校をいじめにより、軽い神経症を患い自主退学を余儀なくされた。

彼の通っていた高校は学区内でもトップレベル、だが、勉強についていけずに落ちこぼれ、周りからいじめの標的にされ、睡眠薬を飲んで自殺を図った。

だが、学校側はこの事実を揉み消し、逆に新川が悪いと言い放ち、自主退学させた。

大山弘子は、勉強についていけずに高校を辞めて、C高校の定時制に入りなおした。

彼女の通っていた高校は、神奈川県有数の進学校、S高校だった。だが、授業のレベルについていけずに、一時的な総合失調症にかかり、高校を退学。

授業が終わり、新川と大山を誘って、茅ヶ崎エメロードにできたラーメン屋に行くことにした。

「新、弘、ラーメンでも食べにいかねー？」

「いいよ。」

2人とも、OK。

次の日、学校とバイトが休みだった俺はシン、ヒロ、そして社会人になった地元の友達、ニシと茅ヶ崎海岸へ泳ぎに出かけた。

茅ヶ崎海岸まで俺の家から原付で10分ほどだ。

車はニシが出してくれた。

まず、俺の家からシンの家へ行き、シンを拾って、次は茅ヶ崎にあるヒロの家へ行くコースだ。

「行つてきます。今日帰り遅いから。」

そう言つて、家を出た。

玄関の前にある軽自動車、ニシの乗る車のドアを開ける。

「おう。行こうや。」

「ああ。」

車の中の音楽をノリのいい、ドラゴンアッシュのアルバムを入れた。

ここからシンの住む家まで車で10分くらいの距離。

シンの家は寒川町にある。

「シン、家に着いたよ。」

「ああ、今行くよ。」

2階建ての一軒家の中から、シンが出てきた。

俺とシンの前通っていたH高校のすぐ近くにある一軒家。

かなりの資産家だろう、シンの家には車が2台あり、広い畑がある。

「ニシ、CD返すよ。」

バッグの中から、黒夢のベスト盤を取り出した。

「そこに置いて。さて、ヒロの家はどこだっけ？」

「ブックオフの近くにあるマンションだ。」

シンがニシに言った。

時間は9時。

熱くなってくる時間だ。

ドラゴンアッシュの『LIFE GOES ON』を流し、寒川町大曲道路を通り、茅ヶ崎中央公園を横目で通り過ぎ、十字路を左に曲がり、エメロードの道に入り、ブックオフの近くで停車。

「えーと、このマンションだったっけな？」

「ヒロに電話してみよう。」

ニシが弘の携帯に電話した。

『もしもし？ちょっとまってね。』

ヒロの声が、ニシの携帯越しに聞こえる。

待つこと数分、ヒロが自慢の長い髪をなびかせて、こちらへ来た。

「ごめん、普通に寝てた。」

「よっしゃ、行くか。」

後部座席にはヒロとシン、助手席には俺が乗り、MINMIの『perfect vision』をかけて茅ヶ崎海岸へ。

「シン、今度またダウンロードしてくれよ。金払うから。」

「いいよ。」

シンが、笑いながら言った。

俺とシンが初めて出会ったとき、『やべえこいつ、完全にアキバ系な人だっ!』と感じた。

シンは分厚い眼鏡をかけていて、今よりも10キロぐらい太ってい

だが、肉体関係のアルバイトやニシと知り合って遊んで行くうちにセンスが変わっていた。

具体的にどう変わったかというと、眼鏡をコンタクトやおしゃれな眼鏡に変えて、体重を落とした。

初めニシと合わせた時、彼は『ヤベエ秋葉系だよ！礼司がオタクをかつあげして、ご飯を奢らせようとしている！』と感じていたという。

「礼司、さっきから何持っているの？」

「ああ、これ？」

俺の手には、昨日スーパーで買った花束。

「これは・・・ばあちゃんに頼まれて、茅ヶ崎海岸で、ちょっとやることがあつてね。」

「？ふーん。」

煙草を、車の外に投げ捨てた。

昨日の晩、また、ひいおじいちゃんが夢枕に立ち、俺に頼みごとをしてきた。

『お前に頼みがある・・・花束を、茅ヶ崎海岸に投げ捨ててほしい。戦争中に撃墜した、敵のパイロットが眠っているから、俺の代わりに供養してきてほしい・・・。』

1年くらい前、茅ヶ崎駅線路爆破事件の犯人が、茅ヶ崎海岸で眠っている。

何故今頃になって頼むのか？と尋ねたら、ひいじいちゃんは複雑そうな顔で、

『あいつも、家族がいただろうし、沢山人を殺したアメリカの連中だけは許すつもりはないが、供養してやりたくなった・・・。』
と言った。

DEEP SEA

茅ヶ崎海岸に着くと、既に水着姿の人たちで海岸は埋め尽くされていた。

茅ヶ崎海岸近くの駐車場は、既に埋め尽くされており、もっと早く家を出ておけばよかったと後悔した。

近くセブンイレブンの駐車場に車を止め、車の中で着替え（ヒロは女子トイレで。）、外に出た。

「礼司、これもつてて。」

ビキニに着替えたヒロが、俺の手にバックを渡す。

水着姿のヒロは、巨乳だ。

おそらくCカップぐらいあるであろう。

顔つきやスタイルも良く、以前某有名女性雑誌のモデルのバイトをしていたこともある。

すれ違う男達の視線が、明らかにいやらしいのがわかる。

「ああ。」

それぞれ貴重品の入ったバッグを手に持ち、俺達は海岸へ向かう。

確か、近くの海の家に、貸しコインロッカーがある。

「礼司。」

一瞬、うしろから、ひいおじいちゃんの声がした。

背筋が冷たく感じる。

目の前に、ひいおじいちゃんの霊が現れ、口を開いた。

「礼司……どこでもいいから、花束を海に添えてやってくれ。

後お前、変な女の子にひっかかなよ……。ちなみに、このヒロっ

て子は、年上の彼氏がいるからな。変な気起こすなよ。」

「分かってるよ。」

ヒロに彼氏がいる事は、以前飲んだ時に本人から聞いたし、写メも見せてもらった。

（その時、一緒に飲んでいたシンが、物凄いへこんでいたが。）

「?どうしたの?」

『クク……じゃあな。あと、お彼岸のおはぎを忘れたら貴様を呪うからな……!』

ひいじいちゃんの顔が、一瞬、バイオハザードのゾンビのような顔になり、うらめしや、と笑いながら、すっ、と消えていった。

「なんでもねー。行こうか。」

「?」

(「ひいばあちゃんといい、どんだけ甘党なんだよ!?!……しかし、恐怖感のない霊だな!」)

茅ヶ崎海岸へ、足早に向かう。

(「花束は、エボシ岩のあたりで海にまこう。」)
確か、エボシ岩までは結構距離があるはずだ、浮き輪がないときつい。

浮き輪を忘れたことに気が付き、ヒロに言った。

「ヒロ、浮き輪を貸してくれない?」

「やだよ。泳げないの?」

「実はさ……」

ヒロ達に、ひいじいちゃんの戦争体験を話すと、快く、浮き輪を貸してくれた。

これで花束を持ったまま、エボシ岩に行くことができる。

ひいじいちゃんが戦争中、撃墜したP51のパイロットが眠る場所は、エボシ岩付近。

その場所まで行こう。

茅ヶ崎の海は、お世辞にもきれいだとは言い切れない。

入れ墨を入れたお兄さんお姉さん、ノーパンで泳ぐ子供達、海の上で平気で煙草をふかす連中……。

エボシ岩……姥島(おばしま)は神奈川県茅ヶ崎市沖合1、200m付近にある無人の岩礁群であり、乳母島とも記述され、古くは筆嶋ともよぶ。

高さは20m余り。

複数の岩からなり、高低の岩が海中にも存在する。烏帽子エボンの形をしているため、一般にエボシ岩とも呼ばれている。釣り人のために茅ヶ崎漁港から渡し船が運航されている。

ちなみに、茅ヶ崎市出身の桑田佳祐がリーダーを務める、サザンオールスターズのヒット曲『チャコの海岸物語』や『HOTEL PACIFIC』の歌詞にもエボシ岩が歌われている。

エボシ岩まで、今俺の居る場所から1キロ以上の距離がある。浮き輪がないとそこまでいくのは絶対無理だ。

人に交じり、海に入り、浮き輪を使い、ひたすら烏帽子岩へ。

泳ぐこと30分位・・・

烏帽子岩に何とか着くと、そこには先客がいた。

ヤンキーらしい金髪の男女が、エボシ岩に登り、小便したり、何かを叫んでいる。

ごつごつした地面を何とか歩き、人気のない所へ。

地面には、煙草の吸殻と空のペットボトル、から缶が転がっている。コンビニの袋で何重に包んだ花束を取り出し、海にそっと投げ捨てる。

戦死したパイロットの弔いの意味を込めて、合掌した。

『礼司、ありがとうな・・・。』

後ろから、ひいおじいちゃんの声がする。

『・・・礼司、お前の所に、直ぐ近いうちに、ある人が訪れる。

前世のお前とは浅からぬ因縁がある。』

何だろうか？

浮き輪に空気を入れなおし、再び、海に入る。

近くにいた、ヤンキーの男女数名はボートに乗り、海岸へもどって行った。

来客（前書き）

ひいおじいちゃんが戦争中に殺した兵士の供養をした礼司。供養が
終わった次の日、ひいおじいちゃんの過去を知る老人が礼司の家に
訪ねてくる。

来客

エボシ岩から戻り、茅ヶ崎海岸で4、5時間ぐらい泳いだ後、ニシの運転する車で家まで送ってもらった。

長時間泳いだせいか、体中が日焼けでヒリヒリする。

家には、姉しかいない。

居間で、浴衣に着替えた姉が、テレビを見ながらビールを飲んでいたら。

「ただいま。」

「お帰り。ひいおじいちゃんの敵の供養はできたの？」

「ああ……。」

食卓には、俺の分の食事がおいてあった。

風呂に水を張り、冷蔵庫からスーパードライを取り出し、のどに流し込む。

「ひいじいちゃん、戦争中、一体何やってたんだろうな？」

煙草を吸っている、姉に尋ねる。

「私にも、わからないよ。ひいおばあちゃんにも、戦争の頃の話はほとんどしなかったって言ってたから。眠いから寝るね。じゃあね。」

「そっさい、自分の部屋に行ってしまった。」

良く考えたら、俺達はひいおじいちゃんの戦争の頃は殆ど知らない。

おばあちゃんが子供のころ、がひいじいちゃんに戦争のころの体験談を聞いても、『昔のこと、忘れちゃったよ。』ととぼけて、何も教えてくれなかったという。

ただ、ひいじいちゃんは死ぬ間際、戦争で仲間を見殺しにしたことを悔みながら死んでいったと、おばあちゃんは言っていた。

自分の部屋をノックする音で気がついた。

「礼司。お客さんが来ているから起きなさい。」
うつん・・・と体を起こす。

「お客さん？」

「ひいおじいちゃんの、戦友の方よ。」

ひいおじいちゃんの戦友？なぜ、俺の家に？

あわてて寝巻を着替え、客の待つ居間へと降りる。

居間には、年配の老人と、その息子夫婦らしき中年の男女が正座して待っていた。

「息子の礼司です。」

母親が、俺を紹介した。

「こんにちは、はじめまして、葉山礼司です。」

年配の老人は、目を見開いて、口を開いた。

「君が、礼司君・・・なるほど、大竹少尉にそっくりだ・・・！」
老人の向かいに座る。

（「このじいさん、ぼけているんじゃないかねーのか？」）

煙草を吸いたい気持ちを抑え、軽く礼をした。

「失礼した、はじめまして、大田和夫です。これが私の息子の博之、息子の家内の良子です。・・・私は、戦争中、小山市朗少尉、君のひいおじいさんの部下でした。・・・なぜ、おじやましたかというと、先週から昨日の夜、小山少尉の夢を見ましてね、『俺のひ孫に会ってくれ。大竹の生まれ変わりだ。』と・・・。」

小山市朗は、俺のひいじいちゃんの名前だ。

「・・・？」

生まれ変わり？

大田老人は、バックから、古ぼけた写真と、短刀を取りだし、テールの真ん中へと置いた。

古ぼけた写真には、若いころのひいおじいちゃんと、見知らぬ男性が二人、零戦とともに映っている。

「これが、私と、隣が大竹さんです。」

「この人が？」

隣にいた母親、姉と共に、大田さんの指さす人を見る。

写真の画像は悪かったが、大竹さんの顔は、なるほど大田さんの言うとおり、俺に似ている。

「礼司に似ている……！」

「そっくりだね……。」

母さんと姉が、2人同時にうなづく。

大竹と言う人を指さす、大田さんの左手の指は、戦争中の負傷だろうか、薬指が第2関節から失われていた。

大田さんは、一呼吸し、口を開いた。

曾祖父の過去（前書き）

大田老人が、礼司の曾祖父の過去を静かに語りだす。

曾祖父は人を殺しかけて刑務所に行きそうになり、軍隊へ入った。
そして、戦場で……。

曾祖父の過去

大田さんは、一呼吸し、言った。

「昭和15年の春です。当時22歳だった小山さんは、奉公先の自転車店主の右腕を斧で切り落とし、憲兵に逮捕されました……」

「奉公先の店長の右腕を斧で切り落とす!？」

「……一体どんな理由でそんなことをしたんだ？」

「何でそんな事を……?」
母が尋ねる。

「……小山さんには、同じ奉公先に付き合っていた彼女がいますね。ある日、店主に女の子が呼び出されて、いやらしいことをされたのです。それを後で知った小山さんは、斧で店主に襲いかかりました。……結局、女の子は心に深い傷を負って自殺しました。」

「……そんなことが?」

「警察に逮捕された後、刑務所に行かずに徴兵され、軍隊に配属になりました。大竹さんは視力が物凄く良く、飛行部隊に配属になりました。そして1年後に太平洋戦争が始まり、真珠湾攻撃に参加後、ラバウルに配属になり、そこで私と大竹さんと知り合ったのです。」

大田さんが、当時の写真を俺達に見せる。

零戦に乗っているひいおじいちゃん。

隣には、サングラスをかけた背の高い人が立っている。

「これは、ラバウルで撮った写真です。隣にいた人は、私の予科練時代の友達でしたが、次の日の戦闘で戦死しました。」

「……」

「私は大竹さん達とは違い、戦闘がへたくそだったし、頭も良くなかったので中尉にはなれませんでした。私の戦争の時の階級は少尉、

大竹さんや小山さんよりも下の階級でした。……。毎日敵基地への爆撃と敵戦闘機との戦闘に明け暮れました。小山さんは零戦を手足のように操り、何度か私や大竹さんの危機を救ってくれました。けど、ある日、私と大竹さん、小山さんの乗る零戦は、敵基地の爆撃をした帰り道に、無数の敵戦闘機の待ち伏せにあって、大竹さんの乗る零戦は、10機の敵戦闘機の囲まれて、炎上爆発……。それが大竹さんの最期でした。」

「……………そう、ですか……………。ひいおじいちゃんは大田さんとは？」

「小山さんもこの戦闘で被弾して、飛行機が炎上する前にパラシュートで脱出しました。私の乗る零戦も、エンジンをやられ、飛行不能になって、沼地に不時着しました。」

次の日、ラバウルから撤退の命令が出ましてね、私達は輸送機で日本に帰国し、厚木基地に配属になりました。当時の日本は、もう既にB29の爆撃にさらされてね、基地に着くなりいきなり出撃を命ぜられました。」

「……………」

「当時の生き残りは、…………私を含めて3人くらいしかいません。良く見ると、大田さんの右耳の耳たぶは、上半分が切れてなくなっていた。」

「茅ヶ崎の隣の町、平塚は軍事工場があったから、連日爆撃がありました。小山さんの家族や親せきは平塚にいたから、爆撃で殆どが亡くなったと聞きました。」

「……………」

「ひいおじいちゃんの親戚が少ないのは、このためか？」

「……………そして、厚木基地から九州の鹿屋に転属になりました。任務は主に特攻隊の護衛です。重い爆弾を積んだ飛行機の護衛をしていました。終戦の日、特攻を命じた当時の司令官に、小山さんは

この短刀で切りかかりました。この短刀は、小山さんが当時の上官を殺さないように、私が小山さんを取り押さえ、小山さんから取り上げたものです。……すいません、お返しします。」

短刀の鞘を抜くと、刀全体に、血の跡らしきものが付いている。

「戦後、小山さんと、私は、ヒロポンの後遺症に悩まされることになって、暫く九州の鹿屋にある病院に入院していました。」

「ヒロポン？」

どこかで聞いたことのある名前だ。

「覚せい剤の一種です。実は……私や小山さん達は、この薬を使っていたよ。」

「……ひいじいちゃんが、覚せい剤を使っていた!？」

姉が大きな声で聞いた。

「……戦争当時はね、軍ぐるみで覚せい剤を使っていたんです。特攻隊員の人たちは、気合を入れるために、この薬を使って、重たい爆弾を積んだ飛行機で敵艦に突っ込んで行きましたよ。……入院していた病院に勤めていたのが、佳代子さん、あなた方のひいおばあさんです。死ぬ前に一度でいいから会いたかった……。私よりも、小山さんの方がヒロポンの禁断症状がひどく、佳代子さんは毎日のように付きつきりで小山さんの看護をしていました。」

確か、ひいばあちゃんは戦争未亡人で、生活費を稼ぐために実家の九州の病院に看護婦として勤めていた。

ひいばあちゃんの前の旦那さんは、戦争中、硫黄島の守備隊に配属され、玉砕、戦死した。

前の旦那さんの写真は、ひいばあちゃんが大事に持っていたアルバムの中に入っている。

「小山さんと佳代子さんは、退院後、仲良くなって、結婚しました。知り合ってほんとうにすぐでしたよ。綺麗な女性だった……。実は私も狙っていたんですよ。」

大田さんが照れくさそうに言う。

確かにひいばあちゃんは写真で見ると、かなりの美人だった。

今だったら、モデルになっているだろう。

「小山さんは幸せだったでしょうね、こんなにいいお孫さん達に囲まれて……。」

大田さんは、微笑みながら俺達を見た。
なんか、照れるな。

「大田さん……俺と大竹さんは、似ているのか？」

「……はい。優しい雰囲気だね。」

優しい雰囲気か？俺は高校の教師を殴って退学になったのに。

大田さんの話が終わり、俺達はひいおじいちゃん、おばあちゃんの墓参りをした後、大田さん達は厚木にある自宅へ帰って行った。

大田さん達が帰った後、いつものように一日を終えて、蒲団に入っ
た。

「礼司……。」

目を開けると、暗闇が目の前に広がっている。

温かくもなく、寒くもなく……。

目の前にいきなり、ひいおじいちゃんが現れる。

「礼司。大田が来たようだな。ちゃんと挨拶したか？」

「あたりまえだよ。……ひいじいちゃん、覚せい剤を使ってい
たんだってな？」

「クク……大田が話したんだな。……ああ、確かに使ったよ。」

「何でだよ……？」

「気合を入れるためだよ。……当時はな、毎日毎晩徹夜で出撃
つてのが当たり前だったからな、皆この薬を毎日打って出撃したん
だ。お前さんの世界でいう、眠気覚ましみたいなもんだ。……け
ど、おかげで佳代子には物凄い迷惑をかけたがな。……礼司……
・大竹の墓参りに行ってくれないか？」

「……何で？」

「俺は見ての通り、こんな体だ。アイツの墓参りをしたくても、俺にはできない。だから、お前が・・・」

「断る。いくら俺の前世とはいえっても、赤の他人じゃねーか。第一、もし、大竹さんの家族に何か言われたら、何て切り返すんだよ？」
俺の前世でした。』か？」

「・・・クク、確かに、そんなこといったら、精神障害者呼ばわりされて警察に呼ばれるのがオチなものな。鑑別所へのリーチがかかっているお前さんにとっては、痛手なものな・・・。」

「だろう？だから・・・。」

「大竹の家族が、いない、と言ったら？」

「？」

「・・・あいつは孤児でな、孤児院の前に捨てられてたんだ。・・・当時の孤児院は、今より酷くてな、虐待が日常茶飯事だったんだ。大竹は虐待されて育ったんだ。あいつはな、20歳の時に孤児院を放火して、刑務所送りになって、軍隊に無理やり入らされたんだ。大竹は結婚していないし奥さんもない。あいつはラバウルに行く前に、自分ひとりだけが入る墓を作って戦争にいったんだ。

その墓は、静岡霊園にある。」

前世の大竹さん、俺よりも危険じゃねえのか？

いくら虐待をされたといつても、放火、つて・・・。

ひいおじいちゃんが、静かに俺に言う。

「頼む、礼司・・・。」

「分かったよ。任せろ。」

『ありがとう！』

ひいおじいちゃんの体が、目の前から消えていく。
そして目の前が真っ暗になった。

前世へのレクイエム（前書き）

前世の記憶・・・誰も前世があるかは分からないだろう。
礼司は、前世で死ぬ間際の夢を見る。
曾祖父の頼み通りに、大竹家の墓参りに行く。
そこで・・・。

前世へのレクイエム

うーん……。

ここはどこだ？全身が熱い。

まるで、俺の体じゃない。

俺の意思とは正反対に、体が動く感じがする。

『大竹中尉！エンジンから油が漏れている！』
耳元で誰かが叫ぶ。

その声で、さっきまで暗かった視界が一気に開けた。

「ここは!？」

目の前に広がる一面の青空。

すべてを包んでくれるような、青い空。

鉄の棒、ひび割れた窓、操縦桿を握る俺の手、汗にまみれたゴーグル……。

まるで、コクピット？

（「これは……俺じゃない……ってことは、まさか、大竹さんの体なのか？」）

『後方敵戦闘機!』

耳元で、聞いたことのある声……ひいおじいちゃんの声がする。

次の瞬間、バンツという音で目の前が見る見るうちに赤く染まる。

エンジンから火が出る。

コクピットが炎に包まれる。

体が動かない。

大竹さんが死んだんだと、感じた。

畜生……俺の夢は、孤児院を開いて、俺と同じような親のない子供達と一緒に暮らすことだったんだ……

畜生……まだ死にたくないよ……。

畜生……熱いよ……!!!!!!!!

体を揺さぶられ、目が開いた。

体中が冷や汗と脂汗でまみれていて、気持ちが悪い。そして、目からは物凄い量の涙。

「礼司……大丈夫なの？」

姉と母が不安そうな顔で目の前にいる。

「俺は……一体どうしたんだ？」

「畜生、って大きな声で叫んでなかった？」

「酷い汗じゃない。悪い夢でも見たの！？」

「熱いから汗かいただけだよ。」

「……悪い夢なら、さつき見た。」

一面の青空の中で、アメリカ軍の戦闘機に後ろから襲われ、なすすべもなく死ぬ夢。

畜生、と叫びながら、炎に包まれて、体が焼け焦げ落ちていく夢。

孤児院を開く夢をかなえることができずに、青い空の中で死ぬ夢。

「……大竹さんの死ぬ間際の事を、リアルに見た。」

「何でもない……シャワー浴びて寝るよ……。」

「礼司……。」

ドアを開けようとすると、姉が俺の腕をつかんだ。

振り向くと、涙を浮かべながら、不安そうに俺の顔を見やる。

「……大竹さんの、夢を見たの？」

「何で知っているの？」

「……何となくね。」

姉が言う。

「礼司、今日はお姉ちゃんと一緒に寝よう。」

「……いいよ。」

姉がそつと、俺の頭を軽くなでた。

その日の夜、俺は姉と寝ることになった。

子供のころ、怖い夢を見て泣いた後、いつも姉と一緒に布団に入っ

て、添い寝してくれた。

20歳近いのに、姉と一緒に布団で寝るのは、不思議に抵抗は感じなかった。

『……………そうでもしないと、永遠に目が覚めないような気がした。』

後日、姉は俺にそう言った。

次の日の朝、俺は家族に事情を話し、学校とバイトを休み、大竹さんの墓参りに行くことにした。

大竹さんの眠る静岡霊園は、静岡県静岡市葵区にある。

電車で3時間ぐらい、JR静岡駅からバスで15分ぐらいの場所にある。

電車とバスを乗り継ぎ、静岡霊園に着き、住職さんに場所を聞き、案内される。

『大竹家乃墓』

そう書かれた墓石は、他の墓同様に、きれいに手入れされている。身寄りがいないのにもかわらずだ。

誰かがやってくれているのか？

バツクから、日本酒と線香を取り出し、線香に火をつける。

『礼司……………ありがとうな……………』

ひいじいちゃんの声が聞こえる。

大竹さんの死の話の後には、続きがある。

後日、ひいおじいちゃんから、大竹さんの話を聞かされた。

実は、大竹さんには結婚を約束した人が、静岡にいた。

その人は、大竹さんがラバウル上空で戦死した後、直ぐに他の人と結婚し子供をもうけた。

その子供は、大竹さんの血の繋がっている子供だった。

再婚した相手は、大竹さんと同じ孤児院出身で、大竹さんと共に虐

待を受けてきた。

その人は、生まれた子供を、実の子供以上に可愛がった。

大竹さんの子供は、やがて大人になり、初めて自分の出生を明かされて、大竹さんの墓を知る。

毎日のように、墓参りをする。

大竹さんの墓が他の人の墓と同じくらいに綺麗なのはそのためだ。

墓参りをしてすぐ後に、初老の老人とすれ違った。

その老人は、大竹さんの墓に行き、線香を添える。

直ぐに、その人が大竹さんの子供だと分かった。

ひいじいちゃんに、後で何でこのことを言わなかったのかと聞くと、

「だって、お前の性格なら、このことを言うとは墓参りをしなかっただろう。」と言われ、複雑な気持ちになった。

前世へのレクイエム（後書き）

僕は前世とかをどちらかと言えば信じる方です。

真冬の出来事（前書き）

礼司は26歳の誕生日を迎える。

姉と共に買い物に入ったジーンズメイトで、とんでもないことを体験する。

真冬の出来事

2009年4月7日、俺は26歳の誕生日を迎えた。

茅ヶ崎駅前の商店街、エメロードを、今日買ったばかりのレットウイングのブーツを履き、姉と一緒に歩く。

「礼司。さっきメールで、シン君達と一緒にご飯を食べようっていつてたから。」

「分かった。」

今から約5年前、俺達はC高校の定時制を卒業した。

シンはパソコン関係の専門学校に進学し、派遣だが、平塚にあるITエンジニア関係の会社に勤めている。

ヒロは寒川町役場の公務員試験に合格し、高校卒業後、寒川町の役場に就職した。

なお、年上の彼氏とは別れ、今はフリーだが、シンとは付き合うこととはなく、普通に友達として遊んでいる。(シンの好意をヒロは知っている。)

そして俺は、卒業後平塚にある自動車部品の工場に契約社員で入社、リーマンブラザーズ倒産のあおりを受けて解雇、2年ぐらい前に茅ヶ崎の派遣会社に登録して、働きながらこれからの道を模索していた。

ニシは、5年前、俺達と遊んだ後仙台に転勤になった。

たまに茅ヶ崎に帰ってきて、俺達と飲む。

「礼司。」

「?」

「大竹さんの夢は、もう見ないよね?」

「ああ。見ないよ。」

姉が、ホッと胸をなでおろした。

大竹さんの夢はもうみないが、大竹さんの命日には必ず墓参りをしている。

ジーンズメイト近くにさしかかる。

「そうだ、ちよつとここで見たいものがあつたんだ。」

姉が俺の腕をつかみ、ジーンズメイトに入る。

きつと、新作のコートが気になったのだろう。

店内に入ると、暖房のあつたかい風が頬に当たる。

姉は、気に言ったコートを手を持ち、試着室へ入って行つた。

「いらつしやいませ。」

新作のジャケットを見てみると、茶髪のロングヘアの女性の店員が、商品を案内しに来た。

「？」

何故だ？

どこかで会つたことのあるような……？

「お客様、何か……ああああああ……」

俺の顔を見るなり、いきなり、奇声を上げて地面に倒れた。

「礼司！アンタ店員さんに何かしたの！？」

姉がコートを着たまま、あわてて、試着室から俺の元に来る。

「いや、してないよ！」

背筋が凍るような感覚がする。

いつも、ひいおじいちゃんが現れるときだけ、この感覚に襲われる。

『礼司……すまない……少しだけ、我慢してくれ。』

いや、我慢しろって言われても！？

次の瞬間、目の前が暗くなった。

真冬の出来事（後書き）

前世の因縁、本当にあるのだろうか？誰か知っているなら、教えてほしい。子供のころ、そう思っていた。

前世の過ち（前書き）

再び礼司の前に姿を現したひいじいちゃん。彼の口から、礼司の前
世、大竹藤次の犯した罪が語られる。

前世の過ち

目を静かに開く。

真つ暗で、光のかけらすらない世界。

温かくもなく寒くもない世界。

3次元の概念がない世界。

俺達が死んだあとに、他の生き物に生まれ変わるのを待機するための場所。

『礼司・・・さつきはすまない!』

目の前に、飛行服に身を包んだ兵士が現れる。

亡くなった俺のひいおじいちゃん、小山市朗。

「何だよじいちゃん!今度は一体何だ!？」

「すまねー・・・すぐに元の世界に戻すからな・・・。お前に言いたいことがあるんだ・・・。」

「何だよ!?!お供え物なら、毎週ちゃんとお供えしているじゃねーか!」

ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんが生前大好きだった、こしあんのおはぎを俺達は毎週欠かさずに茅ヶ崎霊園にお供えしている。

前にいたずらで、つぶあんのおはぎをお供えしたら、ひいおじいちゃんが夢枕に立ち、大声で君が代を聞かせてきた。

「さつき、倒れた女の人はな、戦争中大竹が殺したアメリカ兵の生まれ変わりだ・・・!」

「?生まれ変わり!?!・・・前世の俺が一体何を?」

「・・・俺達が撃墜して、捕虜にした米軍パイロットだ・・・名前前はスミス・ブラウン。」

「その人を、大竹さんが殺したのか!？」

「ああ・・・大竹がな、アイツの頭に拳銃を突きつけて尋問したら、唾を吐きかけてきたから、切れて銃をぶっ放したんだ・・・。その話を、今からしてやろう・・・。聞いておいた方がいい。」

「。。。。」
「。。。。いくら戦争中とはいえ、キレて拳銃をぶっ放すって。。。。相当クレイジーなんだな、俺の前世って。。。。」
物凄い複雑でへこむ気分だ。
ひいおじいちゃんが、お供え物の煙草を吸いながら、静かに当時のことを、話し始めた。

1944年1月某日、俺のひいじいちゃん、小山市朗中尉は大竹藤次中尉、大田敏郎少尉、安住健一郎少尉、野島大二郎少尉を率いて、ラバウル基地を飛び立った。

出撃する1時間前、基地のリーダーがB17爆撃機の編隊を察知、ひいじいちゃんたちに出撃の命令が下った。

この日の戦闘で、安住さん、野島さん達は戦死、ひいじいちゃん達はB17爆撃機を2機、護衛のP38戦闘機を1機撃墜した。

撃墜したB17爆撃機の内1機はラバウル基地の近くに墜落し炎上、スミス・ブラウン中尉を残して全員戦死した。

辛うじて生き延びたスミス中尉は、近くにいた守備隊に見つかり、殺されることなく、捕虜として基地に迎えられる。

ほどなくして、出撃から戻った大竹さんとひいじいちゃん、大田さんがスミス中尉の元に来る。

「オイ、金髪のくそ野郎。。。。お前の所の次の作戦を教えてください、今すぐにも自由にすることができんだぜ？」

大竹さんは、スミス中尉の額に拳銃を突きつけ、笑いながら言った。スミス中尉は、大竹さんの顔に唾を吐いた。

大竹さんは逆上して、拳銃の引き金を引いた。

バンッ、という音の後、スミス中尉の脳みそが壁中に飛び散り、両手を縛られたまま、地べたに倒れる。

一瞬の出来事だった。

近くにいたひいじいちゃんたちは、ぞつとした顔で大竹さんを見やる。

「こいつは流れ弾に当たって死んだ、そうだよな？」

大竹さんは、軽く微笑みながら言った。

「……ああ……。流れ弾に当たって死んだんだよ。」

ひいじいちゃんは苦笑いして、大竹さんの拳銃を取り上げた。

次の日の戦闘で、大竹さんの乗る零戦は、無数のP38戦闘機に後ろから襲われ、なすすべもなく、墜落……。

それがひいじいちゃん達を見た、大竹さんの最後になった。

ひいじいちゃんの話聞いた後、俺はなぜか複雑な気持ちになった。

戦争中とはいえ、俺の前世で殺した人が目の前にいる。

「前世の記憶がある人間はごく稀だ。この女の人は、お前の目の前で前世の記憶を思い出して、気を失ったんだろう。」

目の前で倒れた女性の店員は、前世で殺された記憶を思い出して、気を失った。

やはり謝った方がいいのだろうか？ いや、謝ったところで絶対信じてはくれないし、「こいつ精神障害者なんじゃねーのか？」と思われるだろう。

「礼……買い物中すまなかつたな……。そろそろ時を戻すぞ。」

「そうだ！俺は……。」

「心配するな……。数秒だけ、お前の意識を、死後の世界に飛ばした。そろそろ元の世界にお前の魂を戻す。あと、加奈子に早く結婚しろって伝えといてな。よろしくな。」

姉は32になるのにまだ独身だ。

目の前が光に包まれる。

いつも、ひいじいちゃんと話し終わった後に、目の前が物凄く明るい光に包まれる。

愚かな群衆と救急車

はっ、と、目が覚める。

目の前には、口から泡を吐いて倒れている女性、隣でうろたえるだけで何もしない人達の群れ、試着室から出てきたばかりの姉、ジーンズメイトの店長らしき、俺と同じくらいの年の人。さっきまでいた、ひいおじいちゃんはいない。

「救急車を呼ぼう！」

ジーンズメイトの店長が携帯で救急車を呼ぶ。

年は、俺と同じくらいなのだろうか。

中学校で習った救命法で、この女性の口にたまった泡を掻きだしてやる。

（「この女性がこうなったのも、俺のせいなのだろうか……？」）

俺の不安をよそに、姉が不安そうに、女性に値札のついたコートをかけてやる。

「救急車が来たぞ。」

群衆の一人が言う。

救急隊員が、担架を持ってジーンズメイトに入ってきた。

「第一発見者は……」

「俺だ。」

「状況を……」

「いきなり、奇声をあげて、口から泡を吐いてぶっ倒れた。」
周りが、あやしそうな顔で俺の顔を見やる。

別に犯罪をやった覚えがないのに、何故変な目で俺を見るのか？

（「やっぱり、俺も付いて行った方がいいのだろうか？」）

「礼司……」

「ねーちゃん、……こんなときって、俺も付いて行った方がいいのか？」

「うん、そうしたほうがいいよ・・・礼、もしかして、ひいじいちゃんに会ったの？」

「？何で知っているの？」

「・・・あんたの、顔を見ればわかるよ。行ってきなさい。」
顔を見ればわかる？

姉に言われた通り、俺はこの女性に付き添う形で、救急車に乗った。

救急車に乗るのは、実に10年ぶりだった。

もつともその時は、気絶していたから、記憶はないが。

「浅野さん、意識はありますか？浅野さん・・・」

救急隊員の方が、機械的な声で話しかける。

この女の人の名前は、浅野さんと言つみたいだ。

一応、名前だけでも知っておこう。

顔はゲロと血と泡、酸素マスクで覆われていて、美人なのかブスなのかわからない。

・・・ただ、唯一言えるつてことは、姉と同じくらい（DかEカップ）の巨乳つてことぐらいだ。

救急車の目の前の景色が変わる。

目の前には、俺が以前お世話になったT病院が見える。

救急車が駐車場で止まる。

救急隊員の人たちと一緒に、救急車を降り、浅野さんが担架で運ばれるのを見届ける。

病室は後で聞けばいいから、先に姉に電話をしよう・・・。

携帯の電源を入れて、姉に電話する。

「ねーちゃん！」

「礼ちゃん！病院なの！？どこの病院？」

「T病院だよ！」

「ああ・・・やっぱり、あそこか・・・。父さん母さん達には私から言っておくから、あんたはそこでその女の人とゆっくり話し

なさい……。」

心なしか、姉の声は暗い。

「……もしかして、姉は、俺の前世の罪を知っているのか？」

「じゃあね。」

電話を切る。

「病院の正面入口のドアを開けて、俺は近くにいた、分厚い眼鏡をかけた中年の看護婦さんに、浅野さんの病室を聞くことにした。

「さっきの方ですね……この、病室にいます。」

「ありがとうございます。」

病院の中を、早歩きで歩き、浅野さんの病室に向かう。

この女の人がこうなったのも、俺（の前世）のせいだ……！

浅野さんの前世（前書き）

病院にて、浅野さんの前世、ブラウン中尉と対面する。前世の罪を言及するブラウン中尉と対峙した礼司に、ひいおじいちゃん、小山市朗が現れる。

浅野さんの前世

分厚い眼鏡をかけた中年の看護婦に案内されるまま、浅野さんのいる病室（個室）へ向かった。

いきなり、面会謝絶、の張り紙がある、ってことは、面会できないのか？

少し、病室の前で待つと、白衣を着た中年太りの医者が出てきて、面会謝絶の張り紙を外した。

「誰だよ？こんな悪戯したのは？」

悪戯にも程がある。

病室に入ると、点滴をした女性・・・浅野さんが、虚ろな目で空を見ていた。

「失礼します。」

「・・・どうぞ・・・。ああ、さつきは、すみません・・・。」
客の俺の顔を覚えていてくれたようだ。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫です・・・医者から、レントゲンや検査を受けたけど、どこも異常がないって言われましたから・・・。心配かけてすみません・・・。」

浅野さんの顔は、美人というわけでもないが、丸顔で親しみやすい。

「・・・いや、ないですね・・・。」

「どこかで・・・う・・・。」

うめき声と共に、女性の顔が憎しみの感情でむき出しになる。背筋が寒く感じた。

いつものように、ひいじいちゃんが、現れるのか？
現れる心配はない。

「・・・久しぶりだな・・・！」

（「・・・！いつもの、ひいじいちゃんが現れる感覚じゃない！ってことは、まさか、こいつは・・・。」）

「・・・何十年ぶりの現世か・・・、八八・・・。貴様が、私を殺したのか・・・!!」

「違う、それは俺じゃね・・・!!いや、まあ、俺みたいなものが・・・」

「黙れ、ガキが・・・。貴様の前世が、私を殺したんだ・・・!」
ぱつと見た感じ、浅野さんは姉と同じくらいの歳だろう。

この場所が個室なのが幸いだ。

もし、誰も知らない人が俺と浅野さんのやり取りを見たら、絶対に医者と呼ばれる!

次の瞬間、背筋が物凄く寒くなった。

「ククク・・・。ハロー!人殺し野郎!」

ひいじいちゃんだ。

浅野さんの前に立ち、言った。

「よう、金髪野郎!約60年ぶりの再会だな!女の子の体で転生できてうらやましいなあ!いやらしいことし放題でよ!クハハ・・・!!」

一体、どんな発想をしているのだろうか?

実の曾祖父とはいえ、恥ずかしい。

「貴様!あるとき、私を殺した日本兵の隣にいた・・・!!」

浅野さんの顔が化け物のように、憎しみで醜く変わり、病み上がり
の体でひいじいちゃんにつかみかかろうとする。

「落ち着けよ、ブラウン中尉。こいつに前世の記憶は全くない・・・

・貴方は、無関係の他人を殺すつもりなのかい?・・・アメリカ軍
の規則に、無関係の人間は殺すなって書いてなかったのかい?もう
戦争は終わったんだ。まあ、こいつを殺すのは勝手だがな、・・・
貴方の現世、浅野さんの人生をめちゃくちゃに狂わすことになるん
だぞ!殺人を犯した人間の末路がどうなるか分かるだろう!??」

殺人を犯した人間の末路。

刑務所で何十年も過ごすか、死刑になるか、刑務所から出て、ま
ともな暮らしができるのかどうか?

浅野さんの顔が、少しだが、落ち着いてきた。

「クソツ・・・私の家族はどうなったんだ？」

「安心しろ、お前さんの奥さんは再婚して、3人の子供に恵まれて、沢山の孫やひ孫に囲まれて、6年前天に召された。妹はまだカリフォルニアにいる。沢山の孫に囲まれて幸せそうに暮らしているよ。

これは本当だ。」

「・・・そうか・・・！よかった！」

ブラウン中尉がホツとした顔になった。

「あとな、大竹を止められなかったのは、俺の責任だ。だから前世の記憶を無くして成仏・・・」

「断る。せめて煙草ぐらい吸わせる。」

「・・・断る。言っておくけど、この女の子、煙草吸わないし、気管支喘息だぞ。」

「・・・答える、貴様はなぜ、こいつを護ろうとする？」

ブラウン中尉が、俺の顔を見てひいおじいちゃんに尋ねる。

「・・・こいつが、俺のひ孫だからだよ・・・。まあ、至らないけどな。」

「いやそれ酷くね？」

廊下から、足音が聞こえる。

看護婦と医者のお話声が聞こえてくる。

医者が来たんだ。

浅野さんの表情が、暗く変わる。

「医者が来たか・・・この子のために、眠りにつこう。だが、貴様が俺にしたことは忘れないから・・・！」

「礼司。何もなかったふりをしとけ。俺も消えるから。じゃあな。」

ひいおじいちゃんが、目の前から消えていく。

浅野さんも、まぶたを閉じて、眠りに着いた。

そして、俺はひいおじいちゃんのいいつけとおり、なにもなかったふりで、病室を出た。

絶望の空（前書き）

なんとか病室を出て家に着くことができた礼司。その夜、ブラウン中尉の操縦する爆撃機B17の夢を見る。

絶望の空

病室を出て、姉に電話した。

姉に事情を話し、タクシーで家に帰ることを伝えた。

煙草に火をつけて、茅ヶ崎駅に向かい、タクシーを拾い、家へ。

（「一体何だったんだ……？」）

正直な話、頭が混乱していた。

（「優しそうな女の人が、いきなり豹変した……俺のせいだ！
！」）

窓の外をふと見ると、金髪の女性が日本人の男と何やら楽しそうに話すのが見えた。

金髪の女性はFカップぐらいありそうな巨乳。

「日本人の恥さらしが……！！」

「？お客さん、どうしました？」

タクシーの運転手のおっさんの声で、はっと我に返った。

「いや、何でもありません。」

おっさんは不思議な表情を浮かべていた。

自分でも一瞬何を言ったのか分からなかった。

家の前に着き、タクシーの運転手さんに代金を支払う。

家のドアを開くと、姉が不安そうに待っていた。

「ただいま。ねーちゃん、俺……」

「礼司、私ね、ひいおじいちゃんと昨日さ、夢の中で話したのよ。」

とりあえず、こたつに入って話しようか……。」

居間に入り、こたつに入り、煙草に火をつける。

「姉ちゃんね、ひいおじいちゃんから言われたのよ、昨日の晩。礼司の身の回りで危険なことが起きるから、礼司を守ってやってくわって。お前には負担がかかるかもしれないけど、後で株の情報教えるから御願いつて。後、早く結婚して父さんお母さん達を安心させてやれって事と、酒癖の悪さを直せって言われちゃった、てへっ。」

姉は正直言つて酒癖はかなり悪い方だ。

酔つ払うと必ず奇声をあげて脱ぎだすし、酷い時には泣いて吐きながら脱ぎだすし、警察に保護された事も数知れずだ。

周りがドン引きしても、姉は酒を辞めようとはしない。

しかも酔つ払った時の記憶が殆どないから最悪だ。

そんな姉も、大学生のころは地元のみす茅ヶ崎に選ばれて優勝したこともあった。

しかし、酒癖の悪さのせいで、ここ7年ほど彼氏ができない。

「姉ちゃん、俺は多分平気だよ。姉ちゃんやひいじいちゃんもいるし。」

「・・・礼司、前世で・・・」

「ああ、さつき倒れた人は、俺が前世で殺した人だ。」

「やっぱりね・・・大体わかった。ひいじいちゃんから、その辺のことは聞いているから安心しなさい。」

姉が微笑んで、俺の頭を優しくなでた。

27歳近くになって、姉に頭をなでられるのは照れ臭い。

酒が入らないと、姉は基本的に菩薩のように優しい人だ。

小さいころ、親父や母さんが共稼ぎでないときは、遊びたい盛りなのにまだ子供の俺の面倒を見てくれた。

（「気持ちはずい嬉しいけど、頼むから早く結婚して出て行ってくれ、毎回酔つ払った貴方の世話をすることこの身にもなってくれ。」）

そういいたい気持ちを抑え、煙草に火をつけた。

体が熱い。

目の前には、青い空と白い雲が見える。

体は重くてだるいし、プロペラが回るような耳鳴りが聞こえてきては消える。

（「またか・・・これは、大竹さんの夢なのか？いや、少し違う・・・」）

いきなり、目の前が暗くなったと思ったら、無数の機械の並ぶ部屋にいた。

いや、機械というよりも、爆撃機の中という表現が正しいか。

昔ツタヤで借りた、メンフィスベルという名前の戦争映画（メンフィスベルという名前のつけられたB17爆撃機の戦争体験を映画化した内容だった）そのものの、B17爆撃機のコクピットの中に俺はいた。

目の青い人たち・・・アメリカ軍の兵士。

機械から火花が飛び散り、操縦席にいた兵士の一人が血を流して倒れた。

隣の席に座っていたパイロットは、目から血を流して地べたに倒れ、微動だにしない。

爆撃機はバランスを崩し、一気に急降下を始める。

一瞬のうちに、爆撃機の中は地獄絵図になった。

コクピットの中から外を見ると、緑色で日の丸をつけた戦闘機が、白煙を噴きながら爆撃機から遠ざかっていった。

「あの戦闘機に乗っている日本兵が、君のひいおじいちゃんだ。」

突然、背中がめっちゃくちゃ寒くなった。

いつも、ひいおじいちゃんと会うと襲われる感覚。

だが、今回はいつもとは違う、ブラウン中尉と初めて会った時と同じ感覚。

「あなたは・・・」

おそろおそろ振り返ると、金髪碧眼の27歳くらいの端正な顔の男が立っている。

ひいおじいちゃんと同じ、飛行服に身を包んで。

「この日、私の操縦していたB17は、君のひいおじいちゃんの指揮する零戦5機の捨て身の攻撃を受けて操縦不能になった。腕を抑えてうずくまっているのが私だ。」

英語じゃない。

日本語・・・不自然な日本語じゃない。

前にひいじいちゃんが俺に話してくれた事を思い出した。

「礼司、死後の世界はな、言語はないんだ。思っていたことが皆に伝わるんだ。」

「……。」

「この光景を見て、君は気絶しないのか？私の現世の女の子に見せたら、口から泡を吐いて倒れたよ。」

ブラウン中尉が、不思議そうな顔で俺を見た。

こんな景色なら、ホラー映画やDVD、ゲームやインターネットで見慣れていた。

それに、何年か前にも、これと似た光景を見た。

・・・大竹さんが死んでいく夢に勝る恐怖はない。

「じゃあ、浅野さんがジーンズメイトでさっき倒れたのは、貴方のせいなのか？」

「ああ、そうだ。」

「……最低だな、あんた。」

目の前で人が大量の血を流して倒れているのを見たら、誰でも恐怖におののき気絶するだろう。

女性に人が死んでいく場面を強制的に見せるのは、一体どんな神経の持ち主なのだろうか？

今の俺も、この場面を見て吐き気がしてきた。

「ブラウンさん、浅野さんの体をこれからどうするつもりなんだ？」

「私は、日本人の世界観でいう成仏は自分からは絶対しない。だが、これだけは約束する、浅野さん意識を乗っ取るようなまねは絶対しない……。」

本当だろうか？

リーマンブラザーズが倒産して会社をリストラされた俺は、アメリカという国とそこに住む人間全員を信用することができなくなっていた。

アメリカ人全員が悪いというわけではないのは、分かってはいるが……。

「・・・君こそ、そろそろ出てきたらどうだ？大竹中尉。私が憎
いんだろっ？」

「えっ？」

急に一体何を言い出すんだ？

次の瞬間、頭が滅茶苦茶重くなった。

深夜2時の居酒屋（前書き）

礼司、浅野さんの意識を乗っ取ったブラウン中尉と深夜の居酒屋で対面する。

深夜2時の居酒屋

再び目が覚めると、自分の部屋の布団で寝ていた。

ジーンズメイトでの事件からもう2週間以上たっていた。

浅野さんは1日だけ入院して退院し、職場に復帰した。

近くに置いた携帯電話を開く。

時間は午前2時。

「よう。」

一瞬、のけぞってしまった。

目の前に、ひいおじいちゃんがいた。

「いいねえ、そのリアクション。」

ひいおじいちゃんが腹を押さえて笑うのを見て、むかついた。

「何だよ？」

「礼司、浅野さん・・・いや、ブラウン中尉と飲みに行くぞ。」

こんな時間に、一体、何考えているんだ？

戦争中、ひいおじいちゃんとブラウン中尉は敵同士だったんじゃない

のか？

夢の中で、俺はブラウン中尉と会った。

ブラウン中尉の操縦するB17爆撃機は、ひいおじいちゃん、大竹さ

ん、大田さん達の乗る零戦の捨て身の攻撃で操縦不能になった。

この攻撃で、ひいおじいちゃんの部下2人は護衛のP38に撃墜され、

火だるまになって戦死した。

「早く着替えて、仕度しろよ。」

「待てよじいちゃん。つつうか、今2時じゃねーか。普通に考えて、

寝ているだろう？」

携帯電話を開いたら、時計の針は2時を指していた。

「寝てねーよ。・・・俺には分かる。あいつは、浅野さんの意識

を乗っ取って、茅ヶ崎駅近くの魚民で飲んでいる。」

「何でわかるんだよ？」

「大体分かるんだよ、俺にはアイツの行動すべてが分かる。」

「本当かよ?」

半信半疑のまま、寝巻を着替えて、寝ている親や姉を起こさないように、玄関の鍵を開ける。

もう電車はないから、仕方なく、原付に乗り、茅ヶ崎駅近くの魚民へのルートを走る。

原付に乗るのは、交通事故で死にかけてから、恐怖感があったが、もう無くなった。

茅ヶ崎駅に着き、原付をロータリーの近くに止める。

学生の頃、よくシン達と魚民に飲みに行つて、酔いつぶれた記憶がある。

茅ヶ崎駅前のエメロードには、色々な飲食店や店が多い。

仕事のない時は、一人でいつも茅ヶ崎に入り浸つて時間をつぶしていた。

魚民に入ると、やはり時間のせいなのか、人はあまりいない。

浅野さんを探すと、カウンター席で、ニット帽をかぶった女性が座っていた。

店内には、浅野さんらしき人は他にいない。

「あの……。」

女性の肩をたたくと、真っ赤な頬をしたアンパンマンみたいな顔で俺を見た。

「浅野さん、ですか?」

「……君は……!」

顔は浅野さんだが、やはりブラウン中尉だ。

「生ビール下さい。」

店員に怪しまれないように、ビールを頼んだ。

靴を買ったから、金が5000円くらいしかない。

「何の用だ?」

「とりあえずさ、場所変えませんか?」

「いや、私はここでいい。」

焼き鳥をかじりながら、言った。

突然、背中が寒くなり始める。

「中尉。．．．あんだ、意外と酒豪だな。」

ひいおじいちゃんが、半分呆れた顔で現れる。

「君は．．．。」

「あなたに話があるんだ。これ以上、浅野さんの意識を乗っ取るのはやめろ。彼女の人生をめちゃくちやにする気か？」

「滅茶苦茶だと？私がかしたのか？」

「．．．思い切りしたろうが。誰もいないところで胸を触ったりとか。よくこの女の胸を触りたくなるな。それだけならまだしも、浅野さんの勤め先のジーンズメイトで、店長を誘惑したろ？わざと店長の目の前で脱ぎ始めて、付き合ってくれて言っただろ？．．．言っておくがな、浅野さんはジーンズメイトに好きな人がいるぞ。それに店長も礼司と同じくらいだが、奥さんと5歳の子供がいるんだぞ。人として失格だな。お前さんの勝手だが、意識の戻った後の、浅野さんの気持ちを考えたことはあるか？」

ビールが物凄くまずく感じた。

浅野さんの姿をよく見たら、真冬だというのに胸を強調するキャミソール一枚とダウンジャケットだけ。

オネエ系のスタイルを模倣しているのだろうが、寒くはないのだろうか？

確か浅野さんの年齢は、俺よりも2歳くらい上の29歳だ。

「フン．．．私は、この子の将来を思ってたな．．．。」
真っ赤な顔で、ビールを飲む浅野さんの顔は、どこか親近感を覚える。

「馬鹿か。風俗嬢じゃねーんだ。早く眠りについて、他の生き物に転生しろ。」

（「いや、あなたもだろ？」）

心の中でそう思った。

「転生しようにもな……いつになるんだ？」

「俺にもわからないな……分からないから、こうして現世を漂って、こいつの世話になっている。」

少し前、ひいおじいちゃんから聞いた。

他の生き物に生まれ変わるのには、ある日突然起こる。

頭の中に、生まれ変わる、との指令？が下るらしい。

ひいおじいちゃんは、生前激戦を潜り抜けてきたおかげか、人一倍精神力が強かった。

現世の人の前に姿を現すにはかなりのエネルギーを費やすから、よほどのことがない限りは皆しない。

俺がひいおじいちゃんの霊しか見えないのは、このせいだ。

そのせいか、死んでも他の人たちと同じように、死後の世界で形のない魂の存在にならず、こうして今、俺の前にいる。

居酒屋に着いてから1時間ぐらいの時間がたっていた。

その間、ひいおじいちゃんとブラウン中尉は色々な話をしていた。

俺の前世が犯した犯罪は、今となってはどうでもいいと、ブラウン中尉は笑って言っているのを聞いてほっとした。

ただ、目の前にいる店員が、変な目で俺達のやり取りを見るのが辛い。

「くそ、酒のみてーなチクショー。」

ひいおじいちゃんが、うらやましそうに言った。

「いいだろう？胸も触りたいだろう？んん？」

ブラウン中尉がいきなり、俺の手をつかんで、胸に手を当てた。

酒のせいかな、かなり暖かったが、顔はやはり、アンパンマンみたいだ。

店員が驚いた顔で、浅野さんと俺を見て、直ぐに目をそらした。

「ハハ……そろそろ疲れたので帰るとするか。」

「いや、問題解決してねーだろ。アンタ成仏しねーのかよ？」

「しないね、もう少し、転生する時がくるまで、この子を見守るとするよ。」

「アメリカ人の言うことは信用できないな……。」

「ク・大竹、か？」

「大竹じゃねえよ。これは俺の意見だ。」

ひいじいちゃんが、ククク、と笑った。

「そうか……じゃあ、私はしばしの眠りに着くか……久しぶりの現世、楽しかったよ……。またな……。」

煙草を吸い、軽くせき込みながら、深くまぶたを閉じた。

「あれ……私はここで……？へくちよん、寒い……な、何この格好！？」

どうやら、浅野さんの意識が戻ったようだ。

自分の置かれた状況を把握するのに、時間がかかりそうだ。

「あ、あなたは……。」

「浅野さん、とりあえず一回出ましょうか。コンビニに行って服を買いましょうか。」

ストリートパーマの店員に金を渡して、店を出る。

「礼司。俺も少し疲れたからあの世に戻るよ。お供え物にビールを頼むよ。じゃあな。」

ひいじいちゃんも、そう言って消えていった。

この飲み会での会計は、3000円弱。

近くのコンビニでカイロとシャツを買って浅野さんに渡した。

おかげで、財布の中が一気にさみしくなった。

浅野さんは始発で帰ると言っていたので、俺は自転車で先に帰った。

……明日は仕事なのに眠れなそうだ。

黒い魂（前書き）

ブラウン中尉と仲直りして、前世の因縁を断ち切ることができた礼司。

ある日、高校時代の友人ヒロから電話が入る。

「悪霊がヒロちゃんに取り付いている。」ひいおじいちゃんが礼司に伝える。

はたして、ヒロに取り付いている悪霊とは？

悪霊の目的とは？

黒い魂

ひいおじいちゃんが俺の目の前に現れてから、もう11年近い年月が流れた。

派遣先の事業所での業務を終え、原付に乗って自宅へ行く途中、俺は無性にコンビニに行きたくなり、茅ヶ崎駅前の某コンビニに原付を止めた。

携帯電話がさつきから震えている。

着信はヒロからだ。

最近、ヒロとシン達ともあっていない。

インターネット上だけでしか、最近彼らと会話していない。

「もしもし?どうしたんだ?」

「レイ。今から家に来てほしいんだけど……。」

「?今からって、何かあったのか!？」

気のせいか、背中がぞくぞくする。

やつ……ひいおじいちゃんがいる。

『礼司。ヒロちゃんの所へ今すぐ行ってやれ!』

ひいおじいちゃんが、耳元で騒ぐ。

「さつきからさ、後ろからさ、何か薄暗くて重いものが見えるの……。」

「耳元でね、礼司を連れて来いって、言うの……。」

ヒロには、生まれつき、霊感体質めいたものがある。

ひいおじいちゃんだけしか見ることのできない俺とは違い、ヒロはあの世の者がうすばんやりだが見える。

この力のせいで、ヒロは周りや親からもキチオイ呼ばわりされて、一度精神病院に入院させられた事もある。

「礼司。悪霊って知っているか?」

悪霊……浅野さんの意識を乗っ取った、ブラウン中尉みたいな感じに、人に害を加える精神体。

「ああ、漫画とか小説で読んだことがある!!!人に悪さする霊だろ

う!?!」

原付のキーを回してエンジンを入れる。

「そうだ。ヒロちゃんに、悪霊が取り付いているのが俺には見える。」

「ヒロに寄りついて、一体何する気なんだよ!?!一応塩でも買って
おくか!?!」

塩は悪霊退治の必須アイテム?だ。

「スーパーで売っている食塩は効果ないんだよ……。神社とかで
清めてもらった塩じゃないとだめだ。」

「じゃあ、どうしたら……。」

「こういう場合は、霊がいじるのを飽きるまで待つしかないんだが
な……。俺が悪霊を説得する。早くヒロちゃんの家まで飛ばせ!
ロータリーを曲がり、エメロードに入り、原付を止める。」

時間が夕方というせいもあるから、通行人がめちやくちや多い。

仕方なく、原付を押して行き、ブックオフに原付を止め、ヒロの住
むマンションへと急いだ。

「ヒロ!大丈夫か?今お前の部屋の前にいる。」

「鍵は空いているから、入ってきて……。」

ヒロの声は、ふだんのギャル口調とは違って力がない。

急いで扉を開けると、心地よいアロマの香りが鼻につく。

ヒロの母ちゃんは、香水関係のお店を平塚の方でやっているから、
売れ残った香水をもらってきては家の中で使っているのだ。

「ヒロ!一体どうしたん……。う、なんだ、この異様な空気は……。
」

靈感のない俺でもわかるぐらい、部屋の中の香水のにおいとは対照
的などす黒いものが、部屋の中にあるのが分かった。

「礼司……。」

玄関に靴を揃えて脱ぎ、部屋に入る。

ヒロの家庭は、母親一人だけで親父さんはヒロが小学校の時に離婚
した。

離婚した原因は、神経衰弱による母子性的虐待。

ヒロの親父さんは、優秀なITプログラマーだったが、過度のストレスで自律神経を病んでしまい、まだ小学1年だったヒロやお母さんを性的虐待、弁護士を通じて離婚……。

多額の離婚請求額と、ヒロの母さんの店の繁盛で、ヒロは市役所に勤めながら、悠々自適に暮らしていた。

「ヒロ！大丈夫か!？」

ヒロの部屋、と書かれた扉をあけると、シャネルの香りが部屋に充滿している。

UFOキャッチャーの景品のポケモンのぬいぐるみに囲まれた、かわいらしい部屋で、ヒロは花柄のベットのうえで体育座りするようにして座っていた。

しかも、ヒロの背中には、黒くて重い塊がのっかっているのが、靈感のない俺にもはつきり見える。

「これは……なんだよ？黒くて重たい物が乗っている?」

「礼司……やっぱり、見えるんだ……。昨日さ、仕事で相模兵器工場跡にいった帰りにさ、黒くて重い物が背中に張り付いてきてさ……。塩で清めたけど、全然取れないし……」

当然だ、塩は効かない。

「シンには伝えたのか!?あいつが一番心配しているはずだ!」

「言えないよ……。だって言ったら、こいつが取り付いちやう……。やっぱり、礼司には取りつこうとしないね……。強くて優しい、パイロットが守ってくれているものね……。」

ひいじいちゃんが、照れくさそうに鼻の下を人差し指でこすった。この光景をひいばあちゃんが見たら、どう思うのだろうか?

「礼司。このままじゃ、ヒロちゃんが危険だ……。この黒い塊は、戦争中毒ガス工場で毒ガスを吸って死んでいった人達の魂の集合体だ……。！ブラウン中尉の比じゃない……。！神主や巫女の御払いや、陰陽師、イタコでも除霊できん……。怨みつらみが半端じゃないんだ!……。けど、何だ?何かを伝えようとしているのは……」

「？」

隣の町、寒川町には、一部の人しか知らない、戦争中の忌わしい思い出がある。

昭和15年、寒川町と平塚市に、軍部からの命令で毒ガス工場が作られる。

従業員は主に18歳くらいの若者。学徒動員の大学生、朝鮮からの強制的な出稼ぎできた朝鮮人、はては女学校の生徒がいた。

毒ガスを作る過程で、当時の日本の防毒の技術はまだ未熟だったから、死傷者がたくさん出たし、終戦後、後遺症に悩む人も数多くいた。

終戦後、兵器工場は当然解体したが、毒ガスの入ったビン是谁かが大量に隠し持つて行つてしまった、本土決戦に使うためだ。

つい最近も、相模川の上流でイペリット入りの瓶が見つかったニュースがあつた。

「ねえ、礼司……。」

「うん」

「この子たち、悪くないんだよ……だって、悪いのは、戦争じやん……。頭の中からさ、声が聞こえるのよ……。兵器工場の跡地から離れた空き地にはさ、まだたくさんさんの毒ガス入りの瓶が30本近く埋まつているって……。しかも、埋まっている場所が、民家に面しているって……。」

「礼司。俺も同じ声が聞こえる。」

ひいじいちゃんが頷いて言う。

ヒロの声は涙声だ。

この場にシンがいなくて良かった。

シンがいたら、真つ先に、危険な場所に行かせた市役所を放火しに行くだろう。

あいつは、喧嘩はからつきしの3級品だが、大切なものを護るためには、手段を選ばない非情な男だ。

それに……。シンのように、霊の世界とは無縁な男がこの場所にい

たら、悪霊に取り付かれて発狂している。

「・・・よっしゃ、今からそれを取り出しに行くか!!」

「は・・・馬鹿だな。劇物の取り扱う知識のない俺達に、一体何ができる？あの戦争で作っていた毒ガスのほとんどが、致死率の高いシロモノだ。へたしたらお前まで死ぬぞ。」

「クッ・・・!! 覚せい剤打っていた男が、やけに真面目なことを言うじゃねーか...。」

ヒロが俺とひいじいちゃんとのやりとりを、目を凝らしてみている。忘れていた・・・ひいじいちゃんは、他の人には見えないし声が聞こえないんだ。

「礼司・・・その人の言うとおりだよ・・・。」

「ヒロ。こいつの話がわかるのか？」

「うん。はつきりと伝わってくるもん。」

なんてこった・・・。

じゃあ、今までのやり取りも聞いていたのか？

ヒロ達といった居酒屋で、ひいじいちゃんが誰にも見えないのをいいことに、女の客や店員にいやらしいことをしたりしていたのを、見ていたのか？

黒い塊が、何かを吸収したように、さつきよりも大きくなる。

俺が手でつかもうと思っても、触れず、空をつかむだけ。

あれっ？でも、俺は靈感がないんじゃないじゃなかったのか？

「道理でな・・・加奈子のおかけか・・・。礼司、靈感のある人間と長い間一緒にいたりすると、靈感のない人間の能力が覚醒する場合がある。加奈子はこの子と同じくらい、いや、それ以上に霊が見えるし行っていることが分かるんだよ。もちろん、俺の存在もだ。」

「そう、なのか・・・？」

姉ちゃんが、霊能力者？

黒い魂の願い（前書き）

礼司、怨念達の思いを聞く。

黒い魂の願い

俺の姉、葉山加奈子（32）は人の魂が見れるのか？

ひいじいちゃんが俺達の夢枕に立った少し後、母ちゃん達から聞かされた。

姉ちゃんが子供のころ、よく外で何も無い所で話し始めたことがたびたびあった。

親父やばあちゃんたちはそのたびにねえちゃんを病院に連れていったが、原因は分からずじまい。

だが、姉が成長するに従い、そのことは無くなった。

きつと姉ちゃんは、親父達から精神障害者のレッテルを張られるのが嫌で、この能力を隠していたのだろう。

良くも悪くも、世間の人間達は、特殊な奴を排除したがる。

「礼司・・・なんか、さつきからさ、振えと吐き気が止まらないんだ・・・。なんでだろう？悲しくて寒い・・・。」

ヒロの肩に、きていたジャケットを、優しくかけてやる。

「ヒューヒュー！優しいなあ！」

ひいじいちゃんが小馬鹿にする。

「うるせえ！」

問題は、どうやって除霊するかだ？

一番いい方法は、しかるべきところに依頼して、毒ガスを掘り起こしてもらおう。

だが、どこに電話すればいいんだ？

警察に事情を説明しても、絶対に信用してはくれないだろう。なら、正確な場所が分かれば・・・。

「毒ガスの埋まっている、正確な場所を教えてください・・・！頼む・・・！」

黒い塊に向かって、土下座した。

本当はこんな真似、死んでもしたくない。

だが、友達の命がかかっているんだ。

俺には分かる、このままだとヒロは黒い塊に栄養を奪われて、衰弱死してしまう……。

「礼司……！」

「礼ちゃん……」

ヤマダケンイチロウ……イエノナカニ、カクシモツテイル……ニワニモウメテアル……テロニツカウツモリダヨ……黒い塊の思いが伝わってきた。

けど、なぜか韓国の人が話すような、片言の日本語なのは疑問だけど、テロに使うんだって!?

「毒ガスだと!? 地下鉄サリン事件の二の舞じゃねえか!!」

ひいじいちゃんが叫んだ。

「山田健一郎……まっつてよ、私この人知ってる! 元県会議員で、今は大学で化学の教授をしている人だよ! ちよつと前に、寒川広報で紹介されてた!」

ドクガスコウジョウデ、ハタライテイタヒトノコドモ……タスケテアゲテ……ドクガスヲ、コウキヨニバラマクツモリ……!!!!

「なんだって……そりゃ、大変だ……!」

毒ガス工場で働いていた人の子供……この国に報復するつもりなのか?

しかし、黒い塊の言う言葉が、なぜか韓国人の話す片言の日本語にしか聞こえない。

「やだね、と言ったら?」

「コノオンナヲコロス……」

「何故、ヒロに取り付いた? 他にもいるだろうか?」

ボクノソンザイニキガツイテクレタカラ……。たったそれだけなのか?

ヒロが、突然泣き崩れた。

「ヒロさあ、この子の気持ちわかるよ。だから御願ひ、何とかして

あげて……。」

いや、何とかしてと言われても困る。

不法侵入により27歳派遣社員逮捕……下手したら、警察に捕ま
って、新聞に載ってしまう！

だが、このままシカトして帰っても、胸クソが悪いから、やること
にした。

これがもしシンなら、酒を奢らせるところだ。

ヒロから教えてもらった住所と名前を基に、一度家に帰ってから、
次の日に山田さんの家に向かうことにした。

たまたま、次の日が土曜日でよかった。

俺の勤め先は土日が休みだからだ。

「礼司、スタンガンとかは間違っても持っていくなよ。最近警察う
るせえーから。」

「もってかねーよ！」

ひいじいちゃんは、俺が昔、西とつるんで、オタ学生をカツアゲし
たり、ホームレス狩りをしていたのを知っているから、不安なのだ
ろう。

親には、シンと飲みに行くと言えである。

姉にこのことを伝えようと思ったら、飲みに出かけてしまったよう
だ。

玄関から出て、鍵を閉めて原付に乗ろうとしたとき、いきなり携帯
の着信が鳴った。

着信の主は浅野さん。

「もしもし。」

「おう。今から暇？」

男の声が聞こえる。

浅野さん……じゃない、ブラウン中尉だ。

「ブラウン中尉！？」

「暇だから飲みに行かないか。あの世にいてもスゲー暇だから。」

ブラウン中尉とは、茅ヶ崎の居酒屋で別れてから、もう3週間ぐらいあっていない。

「悪いが断る。用があるのでな。じゃあな。」

「じゃあな。おじいちゃんよろしくな。」

そう言つて、電話は切れた。

「ブラウン中尉か。アイツまだ成仏してなかったんだ。」

「行くぞ、じいちゃん。」

原付のキーを入れる。

朧月夜 in 寒川町

寒川の毒ガス工場の跡は、俺の家から遠く離れた、寒川町丸太の公園にある。

寒川に住む人たちの大半は、毒ガス工場が丸太の公園近辺に存在していたことを知らない。

時間は深夜10時半、ヒロから教えてもらった山田健一郎さん（66）の家は、丸太の公園近くにある。

辺りは暗く、原付のエンジン音だけが静かに響き渡る。

そういえば、明日はセンター試験だ、受験生の皆さんの迷惑にならないように、エンジンを切り、公園近くに止める。

「さてと……まずは何をすればいいのだろうか？」

丸太の公園には、いまはもう使われていない線路がある。

戦時中に、電車で輸送か何かで使うためのものだったらしい。

ヒロは、仕事を終えた後、線路を歩きながらコーヒーを飲んでいたら、黒い塊を見つけ、誰もいなかったこともあってか、声をかけた。

その時に、黒い塊に取り付かれた。

「ヒロも馬鹿だな……シカトしておけばよかったのにな……。」

彼女は優しすぎる。

「礼司、どんな段取りでやるつもりだ？」

「そうだな……ひいじいちゃんが夢枕に立って、説教つてのはどうだ？」

「却下。」

実際、どうすればいいのだろうか？

勝手に家に入ったら確実に不法侵入だし、かといって、シカトするのもなんだし……。

携帯電話の着メロ『純愛歌』が鳴る。

着信の主は姉、加奈子。

「一体何だ？この一大事つてのに。」

ひいじいちゃんがブツブツ言う。

「礼司。今から、ノリコきてちよ〜。」

姉の声はやけにテンションが高い。

きつと酒でも飲んでいるんだ。

ちなみに、ノリコは俺の近所のスナックだ。

「はい！？忙しいから無理だ。」

「ええっ！？せっかく面白い人と出会ったのに。」

「知るかよ！つうか、あんたの方が100倍面白いからな。どんな人なんだよ。」

「あんたの前世で知り合いだった人。ブラウンさんって人。嫌な予感がした。」

俺の前世の知り合い？まさか？やつか……。

「誰？」

「だから、ブラウンって人なのよ〜。」

「……やはり、あの人か。」

姉に一体何をやる気なのか？

「分かった、今から行くよ。」

俺と姉のやり取りを聞いていたひいじいちゃんが、ため息交じりにつぶやく。

「はー、あの男は一体何をやっているんだ……。」

「仕方ねーよ。ブラウンさんの意見を聞こう。」

どつちにしろ、今の俺達は、何もできない。

「は〜あ……つまんねーな……零戦にももう乗れないしな……。」

……死後の世界にいい女の子はいないしな……。」

ひいじいちゃんのため息を聞きながら、原付のエンジンを再びふかそうとした。

その時、背中に寒気がした。

空を見上げると、赤い満月。

家の近所のスナック、ノリコの駐車場に原付を止めた。

店に入ると、客に交じり、姉と浅野さんがスナックのおねえさん達と飲んでいる。

「礼司。」

姉が手を振る。

隣には、浅野さん・・・じゃない、ブラウン中尉がスナックの姉さんの肩に手を回し、煙草を吸っていた。

隣にいたひいじいちゃんが、深いため息をついた。

「ブラウン！・・・いい加減成仏しろよ・・・はあく・・・どうしようもねーな・・・。」

ひいじいちゃんのいうとおりだった。

「礼司。この人」

「オイ、浅野さん・・・いい年した大人が、いったいこんな・・・。」

「まあ、かたいこと言うな。」

ブラウン中尉が赤い顔で、煙草をふかしながらスナックの女店員の胸に軽く手を触れた。

浅野さんの意識を乗っ取ったブラウン中尉は、相変わらず浅野さんの巨乳を強調するようなドレススタイルで決めている。

姉に誘われるまま、ブラウン中尉の隣のソファに座る。

隣の席に座っていた客は不思議そうな顔で俺達のことを見ていた。

「煙草がうまいな・・・ゴホ・・・」

煙草を旨いと言いながら、持病の気管支ぜんそくでせき込んでいるのを見て笑いそうになった。

「ひいじいちゃん、何かあったの？」

姉が、俺の隣にいるひいじいちゃんに小声でたずねる。

「姉さん、ひいじいちゃんのこと、見えるのか？」

「うん。見えるのよ・・・言っただけだね。」

不思議に、ほっと安心した気持になれる。

「このことは、父さん達には内緒だよ。」

「分かっているよ。」

チャイナドレスに身を包んだ、小太りの女の店員に、水割りをいただく。

「礼司君、君のしたいことはわかる・・・だが、今は時期が悪い。」
ブラウン中尉がいきなり真面目な発言をし、姉とひいじいちゃんは啞然とした。

「そのカウンターで、堀北真紀似の女の子と話している人は、・・・君たちの探している山田さんだ。山田さんの家庭は既に奥さんが先立たれて、あと数日で自宅を取り壊して出ていく。その家の防犯システムは、半端じゃない。ボタンひとつで警察が来る。出て行って毒ガスをばらまいた後は・・・大学教授をしながら、息子さんの世話になるそうだ。」

「何故、そんなことを知っているんだ？」

「私は浅野さんの体を借りて、夜のバイトをしていてね、たまたまこの店に勤めているわけだ。今日は休みをもらったのでね、彼女と遊びに来たのだよ。」

ブラウン中尉が姉の胸を軽く触る。

姉は笑いながら、浅野さんの胸を触り返した。

女の子同士のじゃれ付き合いだが、俺は見ていて、ムカつきを覚える。

ひいじいちゃんも、きつと同じ気持ちだ。

「オイ、エロパイロットさんよ・・・どこでどうやって、加奈子と知り合っただ？返答次第ではもう一度死ぬぞ。」

「オイオイオイ・・・戦争が終わって平和な時代になったつてのに、私を殺すのか？浅野さんの人生を考えたことがあるのかい？」

「お前さんが、そんなことを言うなんてな、考えもつかなかったよ・・・軽薄なアメリカ人に死んだ俺の上司や部下、友達たちが悲しく思えてきたよ・・・。」

「フン、パールハーバーの件はどうなるんだい？それに君たち日本人だってジュネーブ協定を護らずに私の友達の捕虜たちを殺したり、人体実験の材料に使っていたじゃないか。」

「実験だと？クク・・・原爆を広島や長崎に、実験に使ったのはどこのどいつなんだよ？」

ブラウン中尉（浅野さん）と、ひいじいちゃんのトークはますますヒートアップした。

「喧嘩している場合か？」

「そうだよ。」

姉が2人をいさめる。

「本題に入るか・・・。加奈子さんは、たまたま会社の忘年会でこの店に入ってきて、ここで働いていた私の存在に気がついた。それから仲良くなつた。それだけだ。彼女の靈感の強さは凄いね・・・。話は戻すが、このまま彼から毒ガスのありかを聞くのは危険だ。下手したら、毒ガスを私達に使う危険性がある。ヒロちゃんという君のガールフレンドには悪いが、山田さんが出ていく瞬間をねらって、毒ガステロを防止しよう。」

「そうだな・・・下手したら、礼司達肉体のある者の命まで奪いかねないからな、俺達霊には効かないけどな。」

俺達の話し合いが終わった後、山田さんの背中を見たら、ヒロと同じ黒い物が取り付いている。

電話には、ヒロからのメール。

「黒い魂たちが、いきなり消えたの。オネエチャンニトリツイテイテゴメンネ、コレハボクラノセキニンダカラ、ボクタチダケデヤル・・・って言っていないか。そっちに行っていない？」

「来ているよ、とは絶対に言えない。」

「来てないよ。暖かくしてねな。久しぶりにシンとチャットでもやれば？」

「うん、そうだね。じゃあね。」

山田さんはカラオケで津軽海峡冬景色を歌い、黒い魂たちを背中に抱えながら、会計を済まして出て行ってしまった。

「礼司、追うぞ。会計は任せた。後で払うから。」

「ええっ!？」

財布の中には、昨日下ろしたばかりの2万円しかない。
店員のお兄さんに会計を聞くと、1万5千円・・・。

深夜の4人

スナックを出ると、大竹さんは腰が悪いのか、杖をつきながら香川駅のタクシー乗り場へ行った。

俺はひいじいちゃんとなぜかブラウン中尉と姉と、大竹さんを尾行することになった。

「何で来るんだよ？」

「だってつままないんだもん。このおじいちゃんを助けないと。姉がせかす。」

だが、尾行で一番いけないのが、騒いで相手にばれることだ。

「お前ら・・・遅いから帰れ。遊びに行くんじゃないんだ。下手したら、死ぬかもしれないんだぞ。」

ひいじいちゃんがブラウン中尉と姉を注意した。

「やだね。だって暇なんだもん、あの世。」

ブラウン中尉・・・浅野さんが、頬を膨らませて言った。

「あそこはそういうところだ。バーやスナックのように賑やかな所ではない。これ以上浅野さんの体に乗っ取るのはやめる。加奈子から聞いたぞ、浅野さんに内緒でスナックやキャバクラでバイトをしてるんだってな。」

「暇だからな。それに不況だし、稼がないとな。」

浅野さんには悪いが、俺がスナックやキャバクラの客だったら、絶対に浅野さんと飲みたくはない。

俺達が話している間、山田さんは黒い魂と共に、タクシーに乗ってしまった。

次の瞬間だ、頭の中で、はっきりとした声が聞こえた。

『ハヤクタステアゲテ・・・イエニアルドクガスヲテロニツカウツモリ・・・』

「礼司！うちらも行くよ！」
姉が叫ぶ。

「馬鹿言え！金がない！」

「仕方ないな……ここは私が出すぞ！うつ……えええええ……」

いきなり、道端で吐き始めた。

姉と飲むと、いつもこうだ。

「ああ……すつきりした……よっしゃ、いっしょ！」

「……はあ……」

ひいおじいちゃんが、深いため息をついた。

「随分、賑やかなひ孫さんだな。」

ブラウン中尉が言う。

「……まあ、至らないけどな。」

ゲロのにおいのする姉にせかされるまま、俺達はタクシーを拾い、山田さんの家へと向かった。

タクシーに乗ること数十分、再び丸太の公園に着いた。

タクシーを降り、姉達と共に、山田さんの家へ。

「礼司、今だから言えるけどさ……ここね、山田さんに取り付いている以上の霊が、見えないけど、たくさん眠っている……。なんか気持ち悪くてさ、子供のころ、遊びに来るのが嫌だったんだよ……」

姉がゲロのにおいを漂わせながら言った。

姉のきているコートにゲロのシミが点々としている。

ひいじいちゃんがうなずく。

丸太の公園は、子供の頃よく、親子で遊びに行った。

「私もだ……ともかく行こう。」

ブラウン中尉が複雑な顔で言った。

山田さんの家は、丸太の公園入り口付近にある。

ここら辺一带に、大規模な毒ガス工場があった。

俺はこの事実を、小学校の先生の話で聞いた。

山田さんの家は2階建ての木造建設で、玄関には警備会社のステッ

カーが貼られている。

(「こりゃあ、下手したら俺達刑務所にいくかもな……。」)
覚悟を決めて、インターホンを鳴らす。

「はい、山田ですが。」

「夜分遅く、失礼します。貴方に話があつてきました。」

「何でしょうか？」

「近所の人から聞きましたね、毒ガスが貴方の家にあると……。」「
「そんなものうちにはありません。貴方夜分遅くに何言っているの
ですか？」

ひいじいちゃんがしびれをきらし、ドアをすり抜け、部屋の中に入
つて行つた。

部屋の中から、ギヤーという悲鳴が聞こえる。

「……。貴様、何故知つている!？」

ほどなくして、山田さんが焦燥した顔で出てきた。

若いころはもてたであろう、端正な顔立ちだ。

そして、背中にはヒロに取り付いていたのと同じ、黒い魂が沢山取
り付いている。

「はあ、はあ……。やっぱ、人前に入るのって疲れるな……。」「

「初めからそうしてくれよ……。」「

山田さんの玄関の前で、いきなり姉が吐いた。

姉と飲むといつもこうだ。

「あくすつきりした……。山田さん、今すぐ毒ガスを廃棄しなさい
!」

「断る!警察呼ぶぞ!」

「ヤベエ!」

今の状況で呼ばれたら、確実にまずい。

「せめて、理由を教えてくださいな。」「

ブラウン中尉が山田さんに聞いた。

山田さんに取り付いている黒い魂は、山田さんの体を覆い始めた。

「やだね……。うっ……。!」

いきなり、地面に大量の血を吐いた。

「山田さん！救急車！！何番だったっけ！？」
姉が叫ぶ。

そして、地面におう吐した。

有る老人の最後

次の日の朝、俺達は警察ではなく、病院の待合室で夜を明かした。病院の中は暖房が利いていて温かったが、心が寒い。何故心が寒いのか？

個室で点滴を受けている山田さんに、医者がいなくなった後、毒ガスを皇居にばらまこうとした理由を聞いた。だした。

・・・山田さんは、戦時中朝鮮半島から強制連行させられてきた若い男女の間に生まれた。

当時の朝鮮人を取り巻く日本の環境は最悪だった。

山田さんの名字は本当は朴なのだが、無理やり日本人の名前に改名させられ、街を歩いていては石を投げられ、国籍が違っただけでいじめの対象になった。

当時、日本は朝鮮人を単なる奴隷としか見ていなかった。

山田さんの親父さんは戦時中は徴兵されることなく、歩兵銃を作る工場に勤めていたのだが、昭和19年ぐらいに毒ガス工場に配属になり、作業中に事故で亡くなった。

山田さんが生まれる少し前の話だ。

その後、山田さんの地獄の日々が続く。

まだ若かった山田さんのお母さんは、生活費のために風俗嬢、ストリップパー、飲食店やら色々な職を転々とした。

そして、山田さんが12歳の時に過労が原因で亡くなり、身寄りがいなかった山田さんは孤児院へ向かうことになる。

孤児院の生活は、今とは違い児童法も充実していなかったから虐待が日常茶飯事だったが、自分と同じ境遇の人たちばかりで友達がたくさんでき、暮らしやすかったらしい。

山田さんは必死に勉強をし、早稲田大学理学部へ特待生として進学、当時ベトナム戦争があったことで盛んになった学生運動にかなり傾倒、この国を内部からぶち壊そうと自分なりにもがいた。

そして、学生運動のさなか、先日亡くなった奥さんと出会い、結婚・
。。。
だが、結婚しようとしたら、山田さんの出生が原因で奥さんの両親
に反対され、大学卒業後、駆け落ちする形で結婚した。

奥さんは去年、末期がんで亡くなった。

奥さんとの間に子供さんも3人設けたが、自立して家を出て行って
しまい、山田さん一人ぼっちになってしまった。

大学での講義を終えた山田さんは、いつも寄っている居酒屋に寄る
うとしたら、いきなり意識を失った。

病院での診断結果は脳腫瘍。

しかも、がん細胞の場所がかなり危険な所にあり、手術はできない、
さらに運が悪く、肺にも転移していて、余命は1年未満。

死ぬと分かった山田さんは、せめて若いころ、果たせなかつた夢・

・天皇暗殺をやるうと、山田さんの御父さんの死んだ毒ガス工場跡
でひたすら毒ガスを探した。

そして集めた毒ガスは30本近く・・・これをあさつて、皇居のパ
レード中にばらまくつもりだったという。

「山田さんのしていることって、悪いことだったのだろうか・・・
？」

ブラウン中尉が、煙草をふかしながらつぶやいた。

「・・・正しいんじゃないかな、この国は天皇暗殺や自爆テロでも
起きない限り、変わるうとはしない・・・。」

ひいじいちゃんが言った。

俺は不思議な気持ちになった。

戦争中、ひいじいちゃんは日本を護るために戦った・・・そういう
と聞こえはいいが、実際は違う。

ひいじいちゃんは、刑務所に行くのが嫌で仕方なく軍隊に入り、視
力がいいだけでパイロットになった。

「ひいじいちゃん・・・戦争中さ、この国を護ろうとする意識はあ
ったのか？」

ひいじいちゃんに聞いた。

「ねーよ。俺は刑務所が嫌で軍隊に入ったんだ。軍隊に入る前の視力検査で、視力が2.5以上あったから海軍航空隊に配属になった。それだけだ。他の国にへつらうだけで、自分から成長しようとはしない国を護る気はないね。」

と言っていた。

「難しい話してないで、コーヒーでもどう？」

姉が熱いコーヒーを4本、持ってきて、俺達に配った。

「コーヒーはひいじいちゃんは飲めないから、後で神棚に供えてやる。」

「おいしーなー・・・ありがとう、かなちゃん。」

浅野さん、いや、ブラウン中尉が美味しそうな顔でコーヒーをすすめる。

「加奈子、照れるんじゃないやねえーよ。・・・ブラウン、テメエ次、かなちゃんって言ったなら、マジで殺すぞ・・・。」

どうやら、ブラウン中尉は姉に惚れたようだ。

姉もまんざらではない顔をしている。

だが、ブラウン中尉やひいおじいちゃんは他の生き物に生まれ変わる運命が待っている。

いつまでも俺達と一緒に遊べないし、ましてや、姉と結婚なんてことは絶対無理だ。

山田さんが大事に持っていた毒ガスは、山田さんが救急車に呼ばれた後、家にあつた毒ガス入りの瓶を俺達が集めて、次の日、警察に話した。

山田さんの家の前で見つけたと、誰かのうわさで、山田さんの家の庭には大量の毒ガスが眠っていると。

警察は半信半疑だったが、俺に出来ることはこれが精いっぱいだ。

山田さんが倒れてから5日後、山田さんは天に召された。

ひいおじいちゃんと山田さんは死後の世界で一度出会った。

だが、山田さんは直ぐに他の生き物に転生してしまった。

そして、主人を失った山田さんの家に取り壊される。

山田さんの家には、誰も住もうとはしない。

「俺が死んだら、あの家を壊してくれ。」

それが俺に告げた、山田さんの一言だった。

一応、俺は山田さんの葬式で、山田さんの息子さん達に山田さんの遺言を伝えた。

丸太の公園近くで、山田さんの家に取り壊されるのを見ながら、原付のキーを入れ、家路に付く。

家の俺の部屋の中で、テレビをつける。

『先日、神奈川県高座郡寒川町元県会議員の家の庭で、毒ガス、イペリットおよびマスタードガス入りのビール瓶30本近くが見つかりました。いずれも、戦争中に寒川町にあった毒ガス工場で作られたものと……。』

テレビの電源を切り、窓を開け、煙草をふかした。

虹空の詩

山田さんの葬式が終わった次の週の土曜日のことだ。

その日俺は、ムカつく仕事を終えて、小雨が降る中、1円パチンコに精を出していた。

背筋が寒くなり、ふと後ろを振り返ると、浅野さんが後ろに立っていた。

「礼司さん……。」

「やあ、どうしたんだい？」

浅野さんは、青ざめた顔で、俺の肩をたたき、言った。

「元気そうだな……。」

「！？貴方は……。」

浅野さんは、隣の空いている『花の慶次』の台に座った。

「ブラウンさん、一体何が……。」

「ああ、こんにちは。どうしたんです？」

浅野さんは煙草を口にくわえながら、パチンコ台に1000円を入れた。

「あれ？浅野さんもやるんですね。」

「ええ。」

浅野さんはてつきりパチンコとは無縁の感じだったが、手つきからして、かなりやりそうだ。

「お姉さんは仕事ですか？」

「ええ。」

浅野さんと姉は、音楽の趣味が合うことで意気投合した。

もちろん、姉は浅野さんの前世、ブラウン中尉に惚れているのだが、浅野さんの人格に惚れていた。

こうして、2人でパチンコをしていると、あのときのことか夢みたかと思える。

俺達を襲った黒い魂は、ヒロの夢枕に立った。

ここから先はヒロが聞いた話だ。

黒い魂は、青白い光に包まれたと思ったら、2人の男女の姿に変わった。

「娘さん、さきほどは失礼した……。私たちの存在に気がついてくれてありがとう。」

「私の息子が大変なご迷惑をおかけしました……。」

2人とも、深々と頭を下げた。

そして、まばゆい光に包まれたと思ったら、直ぐに消えた。

このことを、ヒロからのメールで知った。

パチンコ店を出ると、雨がやみ、外には大きな虹がかかってた。

通行人が珍しがり、写メを取って行く。

浅野さんも撮り始めた。

「すごい！帰ったら早速、ツイッターにアップしよう！」

気のせいだろうか？

虹の橋を、3人の親子が笑いながら歩いて、太陽の方に向かっていくのが見えた。

別れ（前書き）

曾祖父の仇敵、元B17爆撃機隊隊員スミス・ブラウン中尉、天に召される。

別れ

仕事が終わった後、俺は家から離れた寒川神社にいた。

この神社は、家から少し遠いけど、なぜか落ち着けるから、仕事が終わった後いつも立ち寄っていた。

ベンチに腰掛け、煙草に火をつける。

季節は初春、暖かい風が吹く。

こうしてゆっくり煙草をふかしていると、昨日の出来事がうそのように思えてくる。

昨日の晩のことだ。

ブラウン中尉と別れた。

俺と姉ちゃんの夢枕に、ひいじいちゃんと一緒に立ち、碧眼の瞳から一筋の涙を流し、俺達に言った。

「かなちゃん、礼司君、短い間だったけれど、じゃあな……」

浅野さんのために、消えるよ。このまま私が浅野さんの意識を乗っ取り続けたら、いずれ浅野さんの人格がこの世から消えてしまう。

礼司君、かなちゃん、私が消えても浅野さんと遊んでやってくれよな。浅野さんは、実はけっこうシャイな女の子だ。小山君、君とは

一度でいいから、空中戦をしたかったな……。じゃあな。」

そう言うと、強い光に包まれて、消えた。

「ブラウン、貴様とは一度でいいから、やりあいたかったぜ……」

ひいじいちゃんが、お供え物の煙草をふかしながらつぶやいた。

ブラウン中尉は、お世辞にもアメリカ人らしくない顔つきだった。

ひいじいちゃんから前に聞いたが、元々ブラウン中尉は優秀な戦闘機乗りだった。

……だが、ある日の戦闘で、ブラウン中尉は片目を負傷、幸い失明はしなかったが、片目の視力が落ちたために戦闘機部隊から爆撃

機部隊に転属になった。

「ブラウン・・・またね・・・。」

姉ちゃんが、大粒の涙を流しながら言った。

「ブラウンさん・・・達者で・・・。」

俺は個人的にはブラウンさんは好きだった。

俺の前世、大竹さんがブラウン中尉を殺した過去を、ブラウン中尉は笑って「もう60年以上前のことをうじうじ恨んだりしないよ。それよりもさ、浅野さんと遊んでやってくれ。」と許してくれた。浅野さんはなぜか俺と良く飲みたがる。

今日も浅野さんから、「暇なら飲みましようよ。」とのメールが来た。

いつも、ブラウン中尉の意識がなくなった後に、つきっきりで介抱してあげたのがいけなかったのだろうか？

浅野さんは顔は3級品だが、体は1級品だ。

たのむからプチ整形でもしてくれないのだろうか？
言いたいけど言えない。

クソみたいな現実（前書き）

礼司、人生初の金縛りを体験する。

クソみたいな現実

体が熱い。

今は真冬だつてのに、大粒の汗が止まらない。

俺は今ベットのの上にいるが、体が動かない。

これが俗に言う、金縛りつてやつなのか!?

「礼司・・・お前も、もう、27歳になるのか・・・俺が戦闘機部隊の戦隊長を任せられた時と同じ年だな・・・。」

「ひいじいちゃん・・・今度は何だよ？」

「お前には関係ないが、俺の過去と深い因縁のある者が、近い将来、お前の夢枕に立つ。」

「はい!？」

ひいじいちゃんの過去の因縁だと？

「・・・安心しろ、お前らには絶対危害は加えないよう、俺が守つてやる・・・!」

ひいおじいちゃんの顔つきが変わった。

殺人鬼。

思わず、言いたくなくなった。

目が覚めると、時計は6時の針を刺していた。

これから仕事に行かなければいけないのだが、やる気が出ない。

携帯電話を取り出し、現場に休む連絡を入れた。

どうせ、俺がいなくても、現場は回る。

俺の代わり何ていくらでもいる。

これが現実。

どのみち、あと数カ月ぐらいしたら、辞める。

やりたいことは分らないが。

「礼司。今日仕事休むの？」

隣の部屋で寝ていた姉が、俺の話を聞いていたようだ。

「ああ。やる気が出ねーからやめる。」

「やめるって、アンタこれで今月何回休んでいるの？」

家に食費を入れているし、そこそこの貯金をしているし、別にいいじゃねーかと言いたい。

だが、言えない。

「まったく、ひいおじいちゃんがこの場にいたら、しかり飛ばしているよ。・・・おねーちゃん、今日は少し早いから、これから仕事行くからね。」

「・・・。」

「・・・行つてらつしゃいぐらい、言えないのかよ。」

姉はそういうと、わざと扉を強く締めて、出て行った。

別に、俺一人ぐらい、この世の中から消えても、世界情勢にはなんかしらの影響はない。

俺よりもできる、後から入ってきた奴はいくらでもいるし、正直、仕事にモチベーションがない。

皆、死んでくれればいいのに・・・。

寝よう。

65年目の復讐（前書き）

礼司の夢枕に、大田老人が立つ。生前、礼司のひいじいちゃんと共に、旧式の零戦で米軍の最新戦闘機と互角の戦いを繰り広げた人。だが、大田の顔は礼司への怒りで満ち溢れていた。大田と礼司の前世、大竹の間に一体何があったのだろうか？

65年目の復讐

体がふわふわする。

目の前が暗い。

光すらない世界。

何度も来た、死後の世界。

まただ……。

心の中で思った。

ひいじいちゃんが何か伝えようとすると、夢枕に立つ、必ず夢の中で意識だけこの世界に呼ばれ、ひいじいちゃんが現れる。

『礼司君。』

いきなり、目の前に、男が現れる。

全く見覚えのない人で、白い軍服に身を包んでいる。

「あなたは……?」

「……礼司君、お久しぶりです。覚えていますか?大田です。」

大田さん!

生前のひいじいちゃんの部下だった人だ。

俺が17歳の時に、ひいじいちゃんの過去を伝えに来た人。

戦時中、ヒロポンと呼ばれる覚せい剤を打ちながら、ひいじいちゃんと連日徹夜で、故障の多い零戦を操縦して、米軍の最新鋭戦闘機と戦って生き抜いてきたスゴイ人。

生前の姿は、なかなかのイケメンだ。

けど、死後の世界にいるってことは……。

「私は、ついさっき、病院で息を引き取りました。死因は急性心筋梗塞です。」

「……。」

「私はもう、90過ぎの老人ですからね。息子達に迷惑をかけました……。」

大田さんが死んだ。

だが、俺には関係はない。

「礼司君、仕事さぼったでしょう？駄目だよ。」

「フン・・・あんたには、関係ないだろう？」

何故知っているのだろうか？

「教えてあげましょうか？私はね・・・寝ている間、幽体離脱を繰り返していたんですよ。霊になった私は、礼司君や小山さんと出会ったことがある・・・といっても、今のようにね、ちゃんとした姿じゃなかったから、分からなかったでしょうけどね・・・。フフ・・・しかし、大竹さんとそっくりだ・・・。」

「大竹さんと・・・ひいじいちゃんと、同じこと言うんだ・・・俺は、大竹じゃねえ・・・！俺は俺だ・・・！」

「人は知らず知らずのうちからね、過去の行動パターンを繰り返すものですよ・・・それが前世の記憶でもね。大竹さんは、正直言って最悪な人間でした。平気で捕虜を殺すし、女性の民間人や原住民を強姦したり・・・私のいた部隊のつまはじきものでした。君の事、調べさせてもらったよ。仲間を作って強盗や、集団暴行、レイプ・・・大竹さんと変わらないね。私はよく、大竹さんにいじめられたものだ・・・！！！」

大田さんの顔が怒りに歪む。

大田さんには悪いが、第一印象からして、いじめたくなる。

世の中には、いじめられる側の人間は正直いって、存在する。

「フン・・・君が、大竹さんの生まれ変わりなら、生まれ変わる前に、君の人生をめちゃくちゃにするとしようか・・・。」

大田さんが俺の顔に掌を押し付けようと開いた。

大田さんの掌からは、高熱のものを感ずる。

次の瞬間、背筋が物凄く冷たくなるのを感じる。

「よう、大田！」

ひいじいちゃんが目の前に現れた。

「小山さん！」

「ひいじいちゃん！」

大田さんの顔が狼狽した。

「大田よお・・・大竹は確かに悪い奴だが、もう60年以上前の話だろう？お前さん一体どれだけ根に持っているんだよ？第一、こいつ関係あるのかよ？いじめにあつたといつても、軽いじゃれあい程度だったじゃねーか！大竹が一体お前に何をしたつて言うんだ？」

「・・・教えてやろうか、大竹はな、私の弟の勤めていた孤児院を放火したんだよ！弟はな、大竹に包丁でメッタ刺しにされて炎の中で焼け死んだよ！！私の邪魔をするな・・・！」

俺の前世は、そんなひどい人間だったのか！？

「ああん！？過去のことをぐちゃぐちゃと・・・テメエ俺の家族に手を出したら、容赦しねーぞ！！」

大田さんの後ろの闇が、巨大な狼に代わる。

「これは、空間の組成を少し変えて、狼と同じにかえたものだ・・・小山さん、貴方には生前の恩がある。どいてくれないか？」

空間の組成を少し変えて、一体どうやって狼に代わるんだろうか？

「やだね！」

「仕方がない・・・行け！」

巨大な狼が、俺めがけて来る。

逃げようにも体が動かない。

狼の口が開いたと思つたら、いきなり、消えた。

「な・・・。」

「驚くのも無理はないよな・・・俺はな、お前のような怨霊と何度も戦ってきたんだよ・・・お前の使う術など、俺には通用しねえ！・・・故障の多い戦闘機で、B29と戦ってきたときよりかはるかに楽だ！」

「・・・クツ・・・。」

大田さんの顔がさつきよりも酷く狼狽している。

肩で息をしている。

さつき使った技は、かなりの体力を消耗する感じがする。

「礼司、明日現場だろう！？帰るぞ！加奈子達にこれ以上心配かけ

るな！」

ひいじいちゃんと俺の体が、光に包まれる。

「じゃーな！成仏しろよ！」

「待て！貴様ら！」

大田さんのわきに、さっきより小さい狼が、何匹も現れる。

狼たちが牙をむいて飛びかかるうとする瞬間、俺の意識はとんだ。

過去へのケリ

体が熱い。

目の前は、真つ暗な景色ではなくて、いつも見慣れた自分の部屋の光景があった。

さっきの場面・・・大田さんは、俺の前世をひたすら責めていたが、原因は俺にあるのだろうか？

俺の前世が、大田さんの弟を殺したと聞いたが・・・。

仕事が終わった後、俺は茅ヶ崎にあるネットカフェで、過去の陰惨な事件を調べた。

案の定、大田さんが言っていた事件は、直ぐに見つかった。今から60年以上も昔、静岡にある孤児院で、院長と従業員が一人の男、大竹藤次（当時21）に殺された揚句、孤児院もろとも放火される事件があった。

大竹さんは、この孤児院の出身でOBだった。

当時の孤児院は、今のように児童法もなく、虐待が日常茶飯事。

大竹さんもその一人だった。

PCの電源を落とし、煙草に火をつけ、目を閉じる。

不思議にも、頭の中である光景が浮かぶ。

中年の男に、裸で縄で殴られる男の子、煙草の火を押し付けられる男の子、中年の女にいやらしいことをされる女の子・・・。

大竹さんと同じ年ぐらいの従業員。

男の子に性的虐待をする光景が浮かぶ。

煙草がますぐ感じる。

分かった。

大竹さんが、大田さんの弟を殺した原因。

大竹さんの異常な行動のきっかけを作った原因。

大竹さんは、大田さんの行動を知って、孤児院を放火したんだ。孤児の子供たちを逃がして。

なぜ、そんなことが分かるのかって？

それは、俺が前にやったからだ。

背筋が冷たくなる。

「礼司。全てが分かったようだな。しかし、漫画喫茶ってのは、いつ来ても気持ちいいな。入り浸る奴の気持ちができるよ。」

「じいちゃん……。」

「大田が転生しないうちに、ケリをつけるか。」

「どうやって？どうやってこの世界に呼ぶんだ？」

「あいつは烏帽子岩にいる。そこで少し休んだ後に、俺達を殺すつもりだ。」

「烏帽子岩……あの場所か……。」

「待てよ、烏帽子岩から離れたな……寒川神社に行くつもりだ。」

あそこには、成仏できない沢山の霊がいる。霊を仲間に引き入れるつもりだな……！」

漫画喫茶を飛び出した。

もちろん、会計は払ってだが。

菩薩、降臨

寒川神社近くに着くと、辺りはもう真っ暗になっていた。

原付を駐車場に止めて、境内に入ろうとすると、何か目の前にどす黒い物が壁を作っている。

その壁の中に入ると、窒息しそうな程の重苦しい空気が漂っていて、思わず吐いてしまった。

不思議なことに、神社の中には誰の気配が感じない。

時間が時間だからだろう。

「ヒヒヒヒ・・・！」

「！」

後ろから、大田老人の声が響く。

「大田ー！俺が悪かった！だがな、お前の弟は、子供を平気で虐待していたんだ！俺が何度言っても止まらなかったから、殺したんだ！俺の家族は何も悪くはない！だから、殺すのは俺だけにしてくれ！」

「嫌だね！」

「！？？」

目の前の次元がゆがむ。

雑刀を持った、俺と同じくらいの年の青年が次元の谷間から現れる。「貴様のせいで、俺の弟は苦しんで死んだんだ！あいつはもう転生したが、俺は許さないぞ！お前の顔を軍隊で見たとき、背筋に殺意がこもったよ！お前は俺の顔を覚えていなかったがな、戦争中に何度も殺そうとしたのに・・・ええい、死ね！」

「・・・！」

雑刀が、俺めがけて振り下ろされる。

よける気にはならない。

「やめろ！」

ひいじいちゃんの声がする。

背筋が凍るように寒い。

いつもそうだ、奴……ひいじいちゃんが現れるときは、いつもこうだ。

「大田！やめろ！」

薙刀が、ぼろりと、音を立てて崩れた。

「……小山さん、あなたに、たった一人の弟を殺された俺の気持ちかわかるか？生前、あなたには沢山の借りがある……立ち去ってくれ……！！！」

「……人を殺しても、何も変わらないぞ……！俺は佳代子からこいつを見守るように頼まれているんだ！大田、こいつを殺すなら俺を倒してからだ！」

大田さんの顔が、歪む。

ひいじいちゃんの右手が、音を立てて吹き飛んだ。

「クツ……！」

「ハハ……霊でも痛みは感じるんだな。」

「チツ……！」

「とどめだ……！！さようなら、小山中尉……！！！」

大田さんの顔が、再び歪んだ。

ひいじいちゃんの左腕が吹き飛んだ。

「礼司、逃げろ……！」

「できねーよ！大田さん、ひいじいちゃんを殺すなら、俺を殺してくれよ！」

さつきまで、息ができないほど苦しかった空気が、とたんに軽くなつた。

もう夜の8時で、しかも冬至なのに、太陽の光が差し込んでくる。何もかも包み込むような、明るい光が、包み込んでくる。

光の中心には、人影のようなものが見える。

「貴方は……菩薩……！」

「誰だ！？俺の邪魔をする奴は……！クツ、体が、動かない……！」

菩薩様が、俺達の前に立つ。

大田さんの姿は、見る見るうちに、光に包まれる。

「畜生・・・！」

『人を殺しても、何も変わりませんよ・・・。』

菩薩様の声が脳に響く。

『他の生き物の人生を歩みなさい。』

菩薩様が、そう一言言つと、大田さんは光に包まれて消えた。

「貴方は・・・。」

「菩薩様・・・。菩薩様なのですね？」

『貴方がたも、私の存在を知るのはまだ早い・・・。何度も何度も、気が遠くなるような程、輪廻転生をしたら、私に会えますよ・・・。』

菩薩はそういうと、消えた。

ひいじいちゃんと思わず顔を合わせる。

菩薩？

中学時代、社会で習った、日本の神様の存在が、何故ここにいたんだ？

何度も輪廻転生をすれば、会える？

わけの分からね！。

だが、大田さんが転生させられたのは事実だっただけか。

鎮魂歌

菩薩様が俺達の目の前に現れてから、1時間の時が過ぎて行った。その間、俺達は動けなかった、全身の力が抜けて行ったからだ。

「礼司・・・大田の言う通りかもしれねーのかな・・・俺、死後の世界に帰るよ。」

いきなり何を言い出すんだ？

「・・・・・・・・。」

「だがな、加奈子の霊能力は俺が消す。まあ、これでアイツの酒癖も治ると思う。」

姉の霊能力を消しても、酒癖が直るのだろうか？一体どんな根拠なんだ？

「きよとん、としてんじゃねーよ・・・まあ、無理もねーよな・・・。じゃあな、礼司。俺は一足先に帰る・・・。」

「ま、待ってくれよ、じいちゃん・・・いや、小山・・・！」

「大竹、じゃあな。今度会うときは、戦争のない時代に生まれ変わってから、会おうな。」

「・・・小山・・・！」

「じゃあ、またな。バイバイ。」

ひいじいちゃんは、笑いながら、光に包まれて、消えて行った。

半年後。

俺は夜間の大学に通いながら、登録制のバイトを続けていた。

姉の酒癖の悪さは、ひいじいちゃんがいなくなってから不思議に快方に向かった。

普段から姉は霊が見えたり、言葉が聞けることで人の倍以上のストレスを感じていたが、不思議に全く見えなくなったという。

きつと、ストレスを酒で発散していたんだろう。

だが、酒癖がなくなっても、姉は相変わらず結婚相手がいない。

そして今俺は、シンやヒロ、西野達と茅ヶ崎海岸の烏帽子岩にいた。
「礼司。ここなのか？」

「ああ。俺のひいじいちゃんが撃墜したパイロットが、ここらへんで眠っているんだ……。」

ひいじいちゃんの約束……というわけでもないが、不思議に俺は、烏帽子岩に毎年花束を置くことを続けていた。

花屋で買った花束を烏帽子岩において、空を見上げる。

ラバウルで俺が戦死した時と同じ、透き通るような空。すべてを包み込む青色の空。

生と死が交差する青い空。

「パイロットさん、成仏してくれるといいね。」

ヒロが、Cカップの胸を揺らせながら、言った。

「ああ……つうか、シンといつ結婚するんだよ？」

「な……何言っているんだよ？」

「お前こそ、いつ結婚するんだよ!？」

シンが顔を真っ赤にしながら俺の肩をたたく。

シンとヒロはつい最近付き合い始めたことを、俺は知っている。

「さてと、そろそろ行くか。」

空を見上げると、飛行機が爆音を上げて、俺達のはるか上の方を通り過ぎて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471p/>

鎮魂歌

2011年4月11日17時29分発行